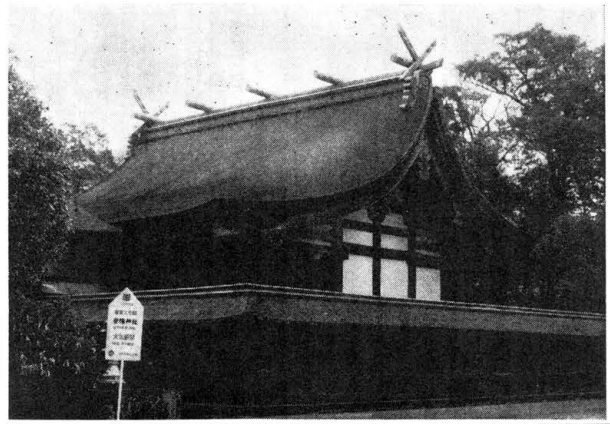
宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共500円

四百年ぶりの解体御修理

重文……本殿・拝殿……今年の夏頃から



弘治三年（一五五七）四月に焼失する以前は、九間四面の九間社流れ造りであったと言われている。現在の本殿は写真のように、桁五間、入四間の五間社流れ造りで屋根の流れが美しい。

宗像大社の本殿、拝殿、（いずれも重要文化財指定）が建築後約四百年ぶりに大々的に解体され、御修復工事が本年八月頃より行なわれることになった。

現在の本殿は天正六年（一五七八年）に時の宗像大宮司氏貞により再建されたもので、同年六月朔日の「第一宮御宝殿御棟上置札」によると、天正三年三月五日に、心字池の土を採って神殿の土持ちを行ない、翌四年から本格的工事に入ったとある。

修理奉行は宗頭豊前武部勝秀賀等、大工は博多津の日高隣岐守定吉で、その年の十月十三日、先ず用材の檜、杉、松、檀等を国内の三笠郡、早良郡、那珂郡及び見益田、肥前松浦の分領に求め、築石を大島岩瀬浦、同鑵石を洲ノ口からこれを採って運んだ。

かくて翌五年二月二日に鋲始、同三月二十三日に木屋入、同年十一月廿日に棟上、翌六年五月二十八日に至って遷宮完了した。

よって同年六月一日丑刻（午前二時）に、仮殿から正遷座の儀を行なって、ここに弘治三年の前本殿焼失以来二十二年目に漸く本殿の竣工を見た。これが現在の本殿である。

このとき造営に当った番匠は、大工、小工二十六人で、延人員七千四百五十六人、鍛冶は大工、小工二人で延人員千余人、塗師は延五百四十人、白壁師は延四百五十人、人夫は領内にて延人員四万六千五百余人、米銀九千百三貫五百十文を要した。まだこの造営の経費については、天正六年六月朔日の「第一宮御遷座御奇進置札」によると、大宮司氏貞より銀百目、奥方より同百目、以下社家、社僧家中から銀、米、鉄等の奇進があり、銀は合せて貫に拾五匁目、米は百四十四石一斗七升を数えたとある。

以上が建築当時の主なる記録であるが、其後の記録によると、文禄二年（一五九二年）の屋根葺替から明治四十年の屋根葺替まで、実に三十三回に及ぶ屋根葺替および修理の時期が記録され、いかに大事に保存管理がなされたかを窺い知ることが出来る。

社殿の構造形式は、五間社流造り、こけら葺で主要寸法は次の通り。

桁行　桁行両端間裏々
九、五六三寸
梁間　梁間　〃　〃
九、九九六寸
軒出側桁長さ　軒負外下角まで
正面一、九一八寸
背面二、〇六六寸
軒高　〃　〃　棟頂上まで
正面三、八九四寸
背面四、三九七寸
平面積　側柱内側面積
九五、四四平米
軒面積　茅負外下角内側面積
一八三、三八平米
屋根面積　茅葺面積
二五四、七三平米

今回の御修理は、文化庁文化財保護部建造物課の指導のもとに解体修理が行なわれるが、特に重要文化財として指定された建造物の保存修理工事であるから、施工に当っては古材の再用と在来技法の踏襲につとめることになっている。工事については昭和四十四年度着工、昭和四十五年度完工の二カ年継続事業で解体工事を終らせる予定であるが、これに引続き本殿、拝殿の防災工事に着工する予定であり、これら一連の工事が完工するには数年の才月を要する見込である。

此の工事期間中は、御神座を第三宮（本殿向って左側の摂社）に御遷座し祭儀を行う予定である。

参拝者並に崇敬者の御便には色々と御不便をおかけしますが、交通安全の祈願を初め諸祭儀は従来通り斎行致します。

尚この工事は大復興事業の一環として、最初に着工される大事業であり、皆様方の真心からなる特別の御協賛を切に御願い申し上げる次第であります。

装飾古墳美術展に当社神宝出陳

―久留米市石橋美術館で―

来る四月二六日から、ブリジストンタイヤで知られる石橋美術館に於て「装飾古墳美術展」が文化庁後援のもとに開催される運びとなった。

この美術展はタイトルのごとく、古墳内に描かれた古代美術の探究と、壁画に使用された女様のそれぞれが、いかなる意味を持ち、墳墓に対していかなる精神を打ち込んでいたか等々の疑問の淵源を解明せんとして企画されたものである。

当社からもこれ等古墳の壁画と比較対照するために、滑石製舟形（重文）古墳の文様に多く使用される唐草文様の最も美しい沖ノ島出土の杏葉（国宝）等が参考品として出陳されることとなった。

又展示会場には嘉穂郡の玉塚古墳の壁画を中心に、絵画的にも最も秀れているとされる竹原古墳壁画、又高句麗古墳との関係深い浮羽郡の珍敬塚古墳壁画、更に福島県の清戸古墳壁画等々の三十五点が一堂に会され、装飾古墳のメッカ、九州の名にし負う美術展となろう。

尚、五月四日から六月一日まで福岡文化会館に於て仏教美術展が開催され、当社から一切縁、狛犬、その他が出陳される。

（期日四月二十六日―五月二十五日まで）

論説　花の集団美

梅や桃の季節につづいて、桜の開花、野山は時を違えぬ草花が、それぞれ出番に揃って春の装いをぐりひろげる。いかなる人間の智力も及ばぬ大自然の恵みである。人間界の離反紛乱の様相は、私心のない大自然の配剤に背いて、多数の意志と称する横車を押す妄動として目にうつる。そこに集団美など、片鱗も感じられない。めざましい花の集団美、時節の到来を待って貯えた力の一斉発揮、その集団美こそ和の心の現われである。

「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山桜花」と詠った本居宣長は、山野に一斉に開いた桜花の美観に強く心を打たれたのであろう。未練な命を擡てる精神の表現と解したのは誤りで、彼はこの歌のどこにも落花紛々を大和心と述べてはいない。集団美に和の心を感じた人間は、集団美どころではない。民主主義の名のもとに権利思想に根ざす大発行動が、民族本来の心性を無視し、破壊しようとするのみで、自家撞着の姿であり、壁に頭をぶつけた苦悶である。わが国産業界の泰斗であり、達識の指導者でもあるA氏の意見を聴くと、

『敗戦後の占領政策の目的は、〃和をもって尊しとする〃日本の民族性を破壊して日本を亡国に導くことになった。この目的を達成するために押しつけられたのが新憲法、新教育法、労働三法であり、ここに権利思想による対立闘争の勢力が導入されたのだ。

このことを具体的事実をもって説明すると、現在、日本の国内に極端に違う二つの現象がある。第一は世界を驚かせている産業界であり、いま一つは世界に醜態を見せている教育界である。

産業界は占領政策を消化、そしゃくし、和の力をもってわが国を今日の世界第二位の産業国に発展させた。これに反し、教育界は、親方日の丸で、自分と直接関係がないので、占領政策を聴くだけにされ、そのまま遺いずりまわって世界に醜態を暴露しているのが実情だ。この二つの出来事をどう見るかということだ」と。

そして和の民族性の復興を強調し、今の世界の流行語となっている「お互いに話合う」ことによって、世界平和への貢献という尊い目標に向って進むのが、日本民族に課せられた使命であり、この使命を果すために現在、在学中の学生も、あらゆる方面で難関に戦うならば、これが真に天の尊い試練を受けた実力のある人間をつくることになる。まず日本人が和の実体をつくってみせよ、と説く。

更に話は先年米国のメロン石油会社社長を、奈良に案内した時、小、中学生の修学旅行の団体に出会っての会話につづく。「日本は子供ばかりでもあるまいに」の冗談から、修学旅行に先生達が交通機関や宿泊の面倒をみて、学童に現地の学習を指導している事情を説明すると、「特別の報酬も受けることなく、先生達は教育のために、非常な尊い努力をしている」と感嘆し、教育界の良き一面を実際に見ていったわけであると。教育者の利害得失を超えた愛情の指導が、学童の秩序ある楽しい旅行風景となって、古都に集団美を展開していたのである。学園の定められた教課の外に、宿泊、輸送、衛生などにこまかく注意して、多数の引率に献身する和の民族性の美しさ、権利思想の本場の外人に、珍しく美しい印象を与えたのであろう。

現在の教育界の紛乱は、戦後の教育の根本方針に誤りがあった。学園だけでなく、家庭と社会一般も、テクニックの習得向上に重点をおき、スピリットを軽んじた、つまり人間教育が学識技芸の教習以前に、絶対不可欠であることを忘れた結果であると、指摘される。学者の良識、教師の熱意は待遇改善によって向上すると、極左的組織は叫ぶが、唯物史観の公式論が示す物質的条件だけが、文教政策の基本となってはならない。

教育界に限らず、スピリットの喪失は小社人間の忘却であって、残るものは物的人間の功利生活のみ。権利思想の産物は、精神文明の先達とはなり得ない。

和の民族の心性を、梅や桜の集団美からだけでなく、野路の草花のすばらしさにも感得させられる。大自然の動きに調和し、その恵みを享受する凡ゆる植物に尊厳性、神秘性をさえ感じさせられる時、民族の心性復興の重大さを教えられるのである。

阿蒙少言

「馬が居る」農村の子供が言う、珍しそうに。耕作も急速に機械化して、田園に年馬の姿が消えて、乗用車も列公目標の風景と変わってきた。肥料、除草、駆虫剤薬品の登場となって、蛍狩りや鮴すくいも昔語りになろう。○「飛行機だ」五十年前の少年は、驚異の眼で仰いだが、今は平気で月旅行のアポロ号を即べ。科学技術はまさに日進月歩の発達、文化という言葉がふんだんに流る。然し、文明は衣食住の物質的進歩は促しているが、人間をはじめ、生きとし生けるものの適性は尊重されていようか○公害が社会問題として大きく取上げられてきたが、人間以外の動物は文明の被害重くなろうとも、時折人間が殊勝げに菩提を吊う「鰻供養」の類で瞑目成仏させる以外に術はない。公害の人間生活への影響、それを科学的に調査して水中大気の汚染データの詮索が、人間の適性障害を凡て解決してくれると期待すること出来ようか。物的人間の功利生活を解決してくれる化学薬品、その魅力は反面に心性人間の忘却となる。○食用に供するために獲る魚の魚、市場安値の情報が入ると沖をかけて近くの臨海工場に持ち込み、公害と称して買い取らせる。道路の建設計画に買収される宅地に、収獲を目的としない果樹園を急造して、向う十五カ年の収獲高と移転の補償費を地代の上に要求する。権利思想が教える貪慾はすさまじい。○自然の恵みの食物を、ただ金銭にかえて捨てる。経済的利益の追求狂奔は幸福路線を走ってはいない。○夢中で獲物を追う猟師山を見ず。自然に生きる人間、それが天理に適った人間である。山を見る心、そこに自然の美、人情の美が見えてくる。

（白雲）

第九四回　宗像大社献詠歌

毎月十五日～切　詠草到着順

垣神に好きて植えたる新助のところ香がほに今さかりなり　吉留　白木うめ

暖冬に夢やぶられし赤蛙四肢わなへかせ枯芝を這ふ　宮田　片山　朔子

一きわに爆音とどろき明滅の赤き灯も消えし桜村の闇　大井　木原ふさ子

鈴ならで湯町とぎりし幌馬車に旅情は深し主婦う驚くて　福岡　高橋　傘翁

来し方も行衛も知らず人の世を八十余年ひとすがき　徳重　石松やす子

水清き我が宗像の釣川の永久にけがるゝ事のなければよ　福岡　吉田　信夫

叱る人嬢いと言ひつゝ人には祖母がふすまにうまるる孫　津屋崎　浜津　鴻浪

錠剤を飲むこと久しくに似る孤独愛する幹も似通い　深田　中野　節子

凍みる夜の日記書きつゝ我が指にへばりつきたるうろこ匂はず　宮田　片山　一

すがすがし日衣の講師頼りまさり老の命を守らむがため　田熊　鷲頭かつ代

かなしみの如きしあはせすでのくれし毛布かつぎて今宵も眠る　東郷　有吉　春子

若杉の峰もみな見ず白き雪の舞い落つるのみ暗き宵の　田熊　小野角次郎

弥生空風光る日の続くなり山水温み種魚育ちをり　田熊　小野かをる

乗用車に追われながらも春雨のぼ降る中を帰へり来たれり　名残　竹原　圓

帰り来る車の音を即ちまたは待ちて眠らず雪の降る夜を　門司　永島　哲夫

病窓に迫る和布刈の公園に春いぶけるを見つゝ楽しも　村山田　吉田佐一郎

戸を操れば里も野山も一色の雪積む木々は桜（ハナ）に勝れる　田久　小方　実

五百年の樹齢の楢も芽ぶきつゝおごそけきかも宗像宮は　大井　村山　幸生

暖冬の春まだ浅きころなから風もなごみて春雨煙る　香椎　桜井　ツ子

残り菜の畑にくれの淡くすぎて春ふむ空の果処あかるし　津屋崎　麦野　時雄

御詠歌の仲入りして淋しさを紛らはすすべにせとと誘はる　戸畑　田中　桂一

浪人の子の入試調始の時に六はせ白銅はぢき成績を占ふ　戸畑　田中ハツセ

肌につけし子のシャツを持ち老い母は孫の入試を神にたのみぬ　遠賀　長畑　房江

残照の長くしなりて夕鯛の後窓の光に日記をつけたり　宗像　中村　幸

親と子の離れ離れの距離感を歎く人来て暗き半日　宮田　北原　君子

妹の傷見舞と二人干車すればホームに白き雪のまいをり　東郷　藤崎　辰子

勤めより戻りたるを夫が脱ぎ捨てし重たき靴の泥を落しぬ　福岡　森　八蔵

宗粕の山積今朝は日雪の帽子冠りて春を迎えん　吉田　古部　由久

すがれたる草ぬきそへて犬ぐり早咲きいでぬ瑠璃色の花　武丸　立石　昇

春雨に小川はいさゝか水増して岸の繁みをゆすぐり流る　武丸　立石ろせ

久々にいでゆの宿り日の射せば軒端のツララ音立て、落つ　武丸　立石ろせ

暖冬に季違えしかゝぶりが厨のすみにのろのろと這ふ　朝町　井上陽之助

春いまだ朝なかなれは冷えしるしまとの上に猫はいねおり　大井　吉田ますみ

求め来しブリジヤの花部屋に匂ひ心やすけし春を待ちつゝ　田島　太田　可愛

神さびし旨厳の下に咲ういし百蘭代（ふるさと）偲ばゆおきつみあらか　田島　白雲　山人

めずらしく波音絶えて神のことけだかくかすむ春の大島

四月のまつり

一日　春まつり
二日　宗像護国神社祭　午前十一時
三日　宮地嶽神社春祭り
津屋崎町宮司に鎮座される日拝社宮地嶽神社の春まつり、当天社より職員が献幣する。
三日　王子神社春祭り
旧拝社王子神社春祭り。許斐山頂に祠がある。山頂まで神職が出向して祭りを奉仕する。春の山頂からの遠望がすばらしい。
六日　徳山宗像神社春祭り
出光興産徳山製油所、並びに若油化学徳山工場に鎮座する宗像神社春まつり。神職、巫女が出向して祭典を奉仕する。
七日　千葉宗像神社春まつり
出光興産千葉製油所に鎮座する宗像神社春まつり。
一五日　月次祭　午前十時
三〇日　中津宮宵まつり
中津宮春まつりは陰暦で行う為、毎年祭日が異ってくる。中津宮は漁業関係者の信仰が厚く、漁業は月の干満と関係するため、中津宮祭は陰暦がかたく守られている。

五月宮
周辺を拡大整備へ

当社ではこの頃、五月宮周辺の整備を計ることとなった。

これは産業道路（若松―芦屋―玄海―津屋崎―福間―古賀―香椎―福岡と海岸線を走る）が昭和四十七年完成を目指して進められており、玄海町江口では当社五月宮附近にこの路線が決定しを為、周辺の土地が、にわかに北九州、福岡の不動産業者の投資対象となり、当社五月宮隣接の松林がモーテル、一棟建てホテルの候補地として絶好の場所とされ、所有者の接衝がはじめられるに至った。この事態を重視した江口部落は直ちに大社に五月宮隣接の土地、確保を申し入れ、先般の役員会に於てこの件が承認された。かって五月宮周辺の神聖護持のために松林約一二〇〇坪が購入され、併せて整備することになったものである。

特にこの度購入した松林のうち、五月宮から西南三十間のところは「土器山（かわらけやま）」と呼ばれ、土器類が出て昔から祭りが行なわれている事を実証している。

五月宮の古記録を調べてみると応安八年（一三七五）神事次第には、五月ノ浮殿、御前の浜等の呼称が用いられていることがわかる神事次第とは、祭典の順序等を記したもので、これによれば五月と八月に当社では五月会、放生会が行われ、五月宮まで御神幸があった。又三月春外祭りと、六月の末日の祓いは、この五月浜で祓いの神事が行われていることを示している。

江戸初期まではここで神幸が行われていたことが筑前国続風土記等によって窺われる。今風土記には「江口村の境内に在り、田島より十三町北也。昔田島の神の御旅所也。五月松原有り。其所に石壇有り」といい、同附録には「田島宮頓宮の地にして、松林の内に石壇あり。いにしへは五月五日大祭ありしが、今は里人つどひて、かたばかりなる祭りを執行公云々」とある。

現在、五月五日に五月祭を五月宮で行っており、古来からの祭りは受継がれている。

この度買収した松林には、旅館（さつき荘）一棟が含まれているが、これは今後宗像大社別館として管理し、有意義に活用してゆく予定で、青少年の研修道場、臨海学舎など多方面の利用が考えられている。しかし、これらの大多数の本格的利用については設備が充分でないので、来るべき天復興後に施設されるものと予想される。

「土器山」を中心とする松林は景勝の地で、足もとに釣川の流れがあり、流れの北に玄海灘の波涛を眺めることが出来る。

海洋族の任務

古典に現われた玄範灘を活動範囲に持つ宗像族や阿曇族の外に、大小多数の海洋氏族があったに違いない。その氏族集団の中にあって、皇祖の御子神である宗像三女神を、氏神に戴く宗像族は氏族の構成も大きく、その勢威も他に秀れて、棟梁的優位を持っていたであろう。

天孫降臨五伴緒以来、各氏族は祖先の技術の継承と氏族社会構成の特性に応じて、民族的分業体制を形成して至ったのである。

神事、武事、織布、製玉等の後世の家職とも言うべき分業が、氏族代々受け継いで発揮一致の神祇政治の時代を経過し、皇室を中心とする氏族国家の発展に貢献してきたのである。

広大な海域に、宗像三女神を祭る三宮を擁して、宗像族も又その社会組織の拡大に伴い、分業体制を強化して行ったことは否めない。海洋資源は豊富であっても、大多数が専従されないし、当然農業に重点が置かれ、中央政庁が確立した農業立国の指針にならったであろう。考古学の一説によれば、わが農耕文化は紀元前三世紀頃に、南部中国及び東南アジアから中国大陸を経て南部朝鮮に伝わり、更に九州地方に渡来したとされる。これは田の神が秋の末に山に帰られて山の神となり、春には里に下りて来て田の守神となるという信仰にもとずくものである。山の神はこのように必ず農耕の神であるかというとそうでもなく、一年中山にいる本来の山の神もある。本来の山の神と時によって田の神ともなるそれの二つの信仰があることを紹介しておきたい。

祭りまつり（四）

農耕の初発期にあたって、この時期に田の神を迎えて、今年の豊穣を祈る素朴なまつりの心が、各地の民俗行事のなかに脈々と受けつがれている。峠の小祠に一串の御餽走を作って田の神に供えたり地方によって様々だが、いずれも予祝の意味をもつものといえよう。山の神は農耕の神であり、田の神とされる。これは田の神が秋の末になると山に帰られて山の神となり、春には里に下りて来て田の守神となるという信仰にもとずくものである。山の神はこのように必ず農耕の神であるかというとそうでもなく、一年中山にいる本来の山の神もある。本来の山の神と時によって田の神ともなるそれの二つの信仰があることを紹介しておきたい。

四月八日は灌仏会と称し、そこかしこの寺院では華やかに花まつりが行われている。しかし、この花まつりは仏教行事から生れたものではなかった。むしろ日本古来の信仰に仏教行事が附加されたと考えるのが至当である。

四月八日は全国的に灌仏会が行われているかというと、必ずしもそうとは限らない。

薩摩の下甑島では昔に聞くことなどまったくないという。むしろ講中打ちをろって山登りをして一日を過す。この日の各地での習俗を眺めてみると長い竹の先にツツジ、石楠、シキミなどをとり付け庭先に立てる風習が多い。これをタカハナ、テンドウバナ等と呼んでいる。花はツツジやシャクナゲが多い。各地で山入りとか、山アソビとかいう行事の根源的なもの、即ち山の神を拝むとかお迎えする信仰がこのタカハナなどの行事に残っているように思われる。

和泉地方のタテハナは、普通屋内の花瓶に立てる風習があり、今日の生花の起源ともいわれている。

四月八日の夜は又、八十八夜の信仰がある。村の鎮守様の境内に八十八夜講中などの石碑をよくみるが、八十八夜の日に苗代に稲の種子を播す風習は全国各地に残っている。この日にお餅を炊いたり、グンゴを供えし、まつりの中に生活を楽しんでいる人々、小さな神々に手を合わせることができる人の心は美しいと思う。

宗像大社史話
社史の中の宗像郡民（四）

は、農耕はまず最初に女性が考え出し従事したとする。特に欧州アジアの大陸各地に、牧草を求めて家畜を追った遊牧民族の生活を考えると、女性主体の農耕起源を首肯せざるを得ない。男性は牧畜、狩猟、戦争などに移動激しく、女性は民族根拠地に定着する期間が比較的長かった。また女性の天賦の能力が、生産的本領を持ち、受胎、出産、哺乳等の育児をはじめ住居、水利等の家事に当り、一面には生活根拠に定着する職分が自然現象を観察する多くの機会を与え、育苗成長の発見創造と進み、これに人為的に工夫改良が重ねられて、農耕文化を生み出したものと見られよう。これには勿論、女性特有の宗教的信仰も作用して、稲作の循環生成に神秘的創造力のはたらいたことも、外国の文化史に比較して、わが古典の記述の中にも見出すのである。

海洋に活躍する宗像族は、早くから交易、戦闘、防衛に他氏族に優先したであろう。遊牧を本領とする民族と異なって、一定の地域を氏族の生活根拠として定着する農耕民族は、牧畜はやはり女性が主体であったと考えられる。育児家事を主任務とする女性が推進力となって、稲作はじめ農耕文化が改良進歩し、屈強壮年の男性の多くは海洋に活動したのである。

従って後世の所謂制海権を握り、宗像を中心とする国土防衛を期するため、早くから水軍が編成され、大島沖ノ島を警護する態勢が固められていた。近隣の海洋氏族とも連合して、九州北辺の要衝に、地方的神祇政治が確立していた。後世の博多港を中心とする防人配備の警戒線布設を見るまで、宗像水軍が防衛力の主勢となっていたであろう。

大化の改新前時代、即ち太宰府が設置されて、筑紫の政治軍事の体制が確立するまで、朝廷の殊遇を受けた宗像族については多くの資料があるが、いずれも宗像大社の神慮の余沢と言うべきである。中でも大和朝廷によって、荘厳な祭祀の行なわれた神島たる沖ノ島に、先ず後世の宗像郡民の先姿の栄光をたずねてみることにしたい。

第二回沖ノ島調査愈々開始される

玄界灘の真っただ中に浮かぶ神の島、沖ノ島（宗像大社神津宮鎮座）は古代から禁忌の祭場として信仰が連綿と続いているが、祭祀遺跡としても全国的に貴重な存在として知られている。

沖ノ島の調査は、宗像大社復興期成会（出光佐三会長）の事業として行なわれてきたが、今回は人材、資材共に前回を上まわる大規模な調査となり、今迄未解決であった古代祭祀の全容が明らかになるものと大いに期待される。

前回の調査は、昭和二十九年より全年三年三年にかけ、九大考古学教室を中心とするメンバーで、南側海岸から沖津宮本殿を中心とする「黄金谷」の周辺が一部調査されただけであった。今回は島の西側「大麻邑」から山中にかけて調査発掘する予定である。本年七月以降、第二回目の本格的調査が開始されることになった。

先ず本調査にさきだって、去る二月二十日、福岡市に於いて、関係者の第一回打合会が行なわれメンバーや、スケジュール等が決定された。その結果四月二日より五日の頃に二泊三日の予定で、現地視察が行なわれる事になった。

許斐の旗風（其の二十五）

草浦柴舟作
福田長庵画

転進（二）

やがて一行を乗せた船団は、志賀島を廻り右手に玄海島を望みつつ博多湾内に進入をはじめた。

女海藻の外洋から湾内に入ると急に波が静かになり船はすべるように走り出した。乗り組んでいる兵士達も船旅を終えた安心感で、どことなくつろぎを見せていた。

この地域は昔から遣唐使や遣新羅使が日本をはなれて、はるかならぬ重要な場所である。

特に志賀島には、古くから志賀海神社がまつられ、阿曇（あずみ）宮司家奉仕のほかに、古来、魚塩をひさぐことを業とした海人の子孫である庶子の古老たちの奉仕する船がありって、正月二日の「歩射祭」、二月と十一月十五日の「かりすなどりの御祭」、十月八日の神幸祭、そのほかの神事に珍しく素朴な伝説が保存されており、阿曇族の祖先である磯良（いそら）が神功皇后の前で踊った磯良の舞や八乙女の舞などよそにはない貴重な芸能が残っている。

またこの地は古く高菜集に数多く歌われた処であるので教育を紹介しよう。

○草枕旅　行く君を愛（うつく）しみ副（たぐ）へ来し志賀の浜辺を。

○志珂の海人の　火気焼（け）ぶりや）き立てて燎（や）く塩のからき恋をもわれはするかも。

○志珂の白水郎（あま）の　釣し燭（とも）せる　漁（いさりび）のほのかに妹を　見すよしもがも

○志賀の浦に　漁（いさり）する海人、　家人の　待恋からむ。

明かし釣る魚。

○志賀の白水郎（あま）の　塩焼き衣、穢（な）れぬれて、恋いふものは　忘れねつも。

郷里に新妻あさを残して出陣している渡辺小太郎克忠の心情も、これらの教育につながるものがあったであろう。

いつしか船団は残島を過ぎ博多の出兵を命じた。

（竜造寺文書による）

愈々下船！

兵士達は、ながい船旅にあきあきしていたので、我さきにと一斉に飛びおりた。

愈々全軍行軍開始の準備が初まった。

その時、熊三が真赤な顔をして仁木義長の本隊の方から走って来た。

「克忠殿！　おおことが出来ました。」

「なんだ熊三」

熊三の顔つきが尋常でないので克忠は何か大事があったと察した。

どうした熊三。

すると熊三はわなとふるえながら、我々許斐の分隊は、いくさに行かずに自城に帰らせるようなことを云っております。

熊三にしてみれば生まれて初めての参戦、この機を逃がせば、いつ機会があるかわからない。残念でたまらぬのはもっともであろう。

やがて仁木義長が渡辺小太郎克忠の詰所を訪れた。

克忠は熊三の報告により仁木義長の訪問の意志は知っているものの大将直々にこの話しを出されると、当惑して返す言葉がない。

仁木義長はおもむろに話しを進めた。

許斐の軍勢は、去る多々良川の合戦については大功を立てて下さった。今後の戦はいつ終るやも知れませぬ。これ以上貴下に迷惑を及ぼすのもびんしつき御帰城下されませ。また後の合戦の駒は地理に明るい軍勢を都合よく手配しております。

（つづく）

許斐の兵士達は博多の町中をよく知ってはいながらも、海路を通って到着した博多の町は、なんとはなしに異国的で眼新らしく感じられる。

永い間、殺伐とした生活を続けてきた兵達は上陸の嬉しさと解放感で異様な雰囲気をただよわせていた。

それを知った許斐の副将、渡辺小太郎克忠はすぐに兵を集めた。

「皆々、ながの船旅御苦労であった。これからさき仁木義長の指示に従い肥前（佐賀県）迄軍を進めることになろう。戦いは今からだ！　重々自重をするよう。」

訓示を終えた克忠は兵達を統率

無事故達成五百万キロ

―西鉄到津営業所で―

去る二月二十日西日本鉄道(株)北九州営業局自動車部到津営業所(所長緒林登男氏)の五〇〇万キロメートル無事故達成報賽祭が当社拝殿に於て斎行された。これは昭和四十二年四月十六日、当社神前に誓約祈願されていたもので、翌四十三年十一月二十九日にその大願が成就したお礼参りである。この日は同営業所助役以下十一名が参拝された。楠根西鉄社長より、その偉業を称えて表彰された大きな楯が神前に供えられ、神恩報謝の真心からなる奉告がなされた。同営業所は北九州市小倉区到津町にあり、総車輌六十三台、従業員一七一名、内運転者一一二名で、主に市内線といわれる近距離の運行営業である。こんにち頓に人と車の混雑状態がひどくなり、市内道路は、一瞬の処置判断の誤りも、気の緩みも許されない。そこには厳しい精神集中力が要求される。加えて多くがワンマンバスに切り替えられ、お客の乗り降りの世話から、サービスまで一手に運転者が引受けている。遠距離運行ならともかく、近距離間運行という不利な条件の中にあって、この営業所の運転者と所員が懸命に努力した成果であって先搬揃って無事故を神前に誓い、それを全うし五百万粁無事故記録を達成されたことは、偏に宗像大神の御加護と同所従業員一同の心を一にしたチームワークのたものである。

記録は参拝当日で五六九九、八〇〇粁、延日数六六五日に達し、現在もその好記録を持続しているとのことである。「大へんでしたね」と申し上げたら、「これからも神前での誓いを忘れず、六百万、七百万、一千万粁と記録を伸ばし、事故のない営業所にします よ」と自信に満ちた心強い言葉が返ってきた。

西鉄各営業所では新車を購入される毎に参拝され安全運転に努力されている。

交通事故の悲惨なニュースが絶えない今日に、またとない明るいニュースである。

大島村の火災に

中学生消防隊の活躍

―村民感激の讃辞―

去る三月十四夜、宗像郡の大島に火災発生、村の中心地域で家屋密集し、農協から出火して隣接の役場に延焼して、火勢は恐るべき大火への様相を呈した。

あいにくと、その前日までシケ続きで出漁しなかったのに、その日は風波おだやかで、多くの漁民が不在だった。消防ポンプは引出したものの、人手不足と火の廻りの早さに、断ずけた人数も当惑した時である。

突如！婦人会の支援をうけて中学生消防隊が現場に出現。その活躍は大人達も目をみはるほど、すばらしい行動を展開した。一部は平素訓練されたバケツリレー、一部は猛火を冒して役場の書類搬出、ある者はポンプの操作を助勢して機敏な消火。

危険を物ともせず、出漁の大人達に代って村を救う義務感に、自ら励まし合って驚異の活躍に突進したのであった。

火災は最初の五分間が大事という。彼等は危険に身をさらして、出漁船の帰着や隣方消防隊の到着までに、鎮火したい被害を最少に喰い止めたいと、協力一致あつぱれの努力を続けた。

彼等の必死の活動は功を奏した。応援隊が諸方から、この離島めがけて集った頃は、殆んど火勢はおさまっていたのである。ある者は負傷した。ある者は過労に倒れた。然し、彼等の平素の訓練と村のためという誠心が、災害を最少限度にとどめたこと、焼跡視察の専門家は賞賛を惜しまなかった。

数日後行なわれた中学校卒業式に、大島村長は学校当局の指導と、生徒諸君の功労に深く感謝の意を表わしたのである。

なお宗像大社は、見舞金として金一封を村当局に贈呈した。

宗像の諸城

城址を訪ねて (完)

大島城址

宗像神社中津宮の鎮座する大島にあるこの城址は、片脇城に次ぐ重大な意義を持つ城とされていた。つまり、宗像全部の諸城が敵の手に落ちた時、辺津宮も如何ともし難い、その折はせめて中津宮、沖津宮だけでも守るための最後の詰城とされていた。このことは、許斐城址の項に述べたように天文二十三年(一五五四)大友の後援を得た立花城勢の奇襲で片脇城も敵の手に落ち、大島城まで逃れ、約一カ年余、宗像族の祭祀を中止せざるを得なかった。大島は、神湊から小舟で約一時間、周囲十二キロの島である。敵の攻防に対し地の利を得た詰城として最上の条件を備えていた。

以上これまで訪ねてきた諸城址、又これ以外の小さな詰城も、天正九年(一五八一)宗像族の下臣、吉田勢が河津勢に加勢を申し出、大友から立花へ兵糧、弾薬を送る軍勢を打たんとして出城したのに始まり、全城最後の軍さが展開されたのであった。

時の宗像族の配下であった河津勢は父の讐をもつ原田源右衛門を主として討って出たものの、原田はすぐに敵の鉄砲で倒れ、吉田勢のみの戦さとなってしまった。吉田勢もすでに引けず、小金原に討って出た。一方立花勢は粕屋の援軍を得、愈々戦力を増し、ついに吉田勢一門の七十余騎は死償となって駆け入った。中でも吉田次郎左衛門、同助解田左衛門の二騎は大勢の中に駆け入り、二十騎の敵を討ったもの、降る雨のごとき敵の矢についに両人の身は矢で蜂のごとくとなったまゝ立ちすくみに死ぬ。宗像勢もやっと赤馬の城(鳥ヶ兵城)からの援軍によって救われ立花勢の撤退となった。そして二応この戦さは休止となった。この時氏貞が大和石近充に送った書状がある。

「於去十大日吉原口、立花衆被懸合、遂防戦、被手火矢疵左頸一ケ所粉骨次第、誠感悦也、弥可被抽忠義軍肝要候、恐々謹言

三月二十八日　氏貞　大和石近充殿」

そして天正十四年三月宗像宮最後の大宮司氏貞がついに倒れ、諸城も氏貞の霊と共に静かに眠ることとなった。

大宮司氏貞、最後の筆になる次の四言四句がある。

明徳六、五十二年、即今退矣

築籍其天、

日本消防協会から

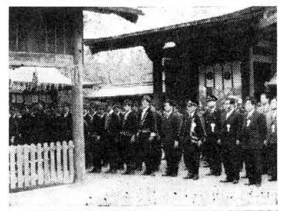
晴れの受賞

―玄海町消防団―

寒さがまた去りやらぬ三月七日午前十時より、当社に於て玄海町消防団の日本消防協会表彰旗受賞記念式典が行なわれた。

まず玄海小学校ブラスバンドの先導で入場行進。団旗を表彰旗を先頭に団員は威風堂々と拝殿前に行進整列する。代表者昇殿後、受賞奉告祭並に表彰旗入魂祭が斎行され、引続き境内に於いて模範消防演習が行なわれた。

当日は、県知事代理、日本消防協会々長、県議会議長、県消防災害課長、県下消防協会各支部長、地元各町長、町議その他各界代表関係者多数が参列され、熱の入った演習に暖かい拍手が贈られた。この表彰は消防団の元締たる日本消防協会が、毎年各県の最優秀団を表彰するもので、今年は六十五団体が受賞し、うち福岡県では遠賀郡水巻町と当町の各消防団が受賞したものである。その選考対象は消防設備の充実度合技術、活躍、規律、服装にまで及ぶとのことで、県下一〇八団中の今年のホープといったところ。



現在玄海町の消防体制は四分団からなり、本部三名、第一分団(田島地区)五三名、第二分団(池野地区)六二名、第三分団(岬地区)六八名、第四分団(神湊地区)五四名の計二四〇名の団員と、五台の消防車と多数の消火用器具を備えている。

芳醇の祭り

"末社　松ノ尾神社で"

去る三月十九日、当社境内末社松尾神社に於て、北筑杜氏組合による新酒醸造報賽の祭りが行なわれた。松ノ尾神社は、酒の神として昔から信仰を集め、昨年つくり込み前の祭りに集まった杜氏さんたち。

遠方の日新酒を手にして参列、神前に今年の努力の結晶を供え、感謝の誠を捧げた。

末社周囲の両端には織りがひるがえり、新酒の香りが流れて、祭典は終了した。

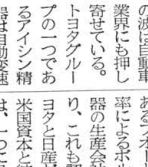
この後、杜氏さん達は社務所でかしわのすき焼きをつつきながら新酒の出来映えについて語り合った。

一番大事な事は、火を消すという任務より、火を出させないということが大事である、団長さんもその為の啓蒙には今後とも最善を尽くして行きたいとのことであった。

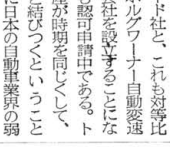
話題の新車をみる (三六)

ルーチェ一八〇〇の巻

資本自由化の波は自動車業界にも押し寄せている。トヨタグループの一つであるアイシン精器は自動変速器の専門メーカーである米国ボルグワーナー社と五〇%対等比率によるボルグワーナー自動変速機の設立認可申請を行い、日産自動車と、東洋工業は共同出資によりアイシン精器の専門メーカーであるドイツのフォード社と、これも対等比率による自動変速器の穴を埋めたことになり、一方米国側としても米国資本自由化の時に際して自動変速器に関する部品供給会社を確保したことになるのである。



資本自由化により、米国ビックスリーの一つであるフォード社と、これも対等比率による米国ボルグワーナー自動変速器の生産会社を設立することになり、これも認可申請中である。トヨタと日産が時期を同じくして、米国資本と結びつくということは、一つは日本の自動車業界の弱みである自動変速器の穴を埋めたことになり、一方米国側としても米国資本自由化の時に際して自動変速器に関する部品供給会社を確保したことになるのである。



四十一年八月に発売されたルーチェ一五〇〇に続いて東洋工業は一八〇〇を発売した。フロント、ボンネットにエアースクープを設けて、リヤピラーに車室内の換気口を設けているのが一五〇〇のボデースタイルと違う点で、あとはすべて同じである。この車も昨今流行の安全対策に力を入れ、シヨック吸収ハンドル、前輪ディスクブレーキ、前席三点式シートベルト、床型式ヘッドレスト、六、四五と太い高速性偏平タイヤ等を装備、又スパーデラックス車においてはオートウィンドー、オートロックを採用、オートウィンドーには、走行中でも遠転席のスイッチで回路を切るドライバーカットの安全装置つきである。ちなみにオートドアロックというのは自動車のスピードが約十キロ以上になると、運転席を除くすべてのドアが自動的にロックされ、停止すると、すべてのドアのロックが解除される装置だそうである。

エンジン型式は水冷直列四気筒OHC、総排気量1796cc、ボアxストロークは78×94mm、最高出力100ps550rpm、という高性能エンジンで、カムシャフトはシリンダーヘッドに取り付けられ、英国製レノル社の二列チェーンによって駆動されている。

最高速度165Km/h、最少回転径9m、クラッチ型式は乾燥単板式ダイヤフラム式、トランスミッション、前進四段後退一段フルシンクロメッシュ、車軸方式は前輪、ウィッシュボーン独立懸架、後輪は半浮動式である。

スーパーデラックス車においてはラジオ付きカーステレオまで装備して、四、五年前の車では考えられぬ程豪華である。

宗像伝説　其の九十

「津瀬山瀧」

村の北に町滝口にあり、高一丈三尺、幅一丈四尺。水源深谷、牟田谷、ウツキ谷、大鋸谷四澗より出つ。流注一町に及ばずして、釣川に入る。

木枯が野を吹いていた建仁三年春、盲僧が一人、琵琶をかかえ衣のすそを風に舞わせて釣川沿いの往冠をたって来た。半刻後彼の姿は、田島さまのほとりの堂手の前にあった。ここには先年宗の医王山より平重盛追善のため送られてきた阿弥陀経石と経巻が納められている。琵琶を弾じること数刻。僧の姿はそこにはなかった。その日より永い間彼はヒョウゼンと現われ弾じ続けるやいすこともなく去っていった。

村人等は彼を阿弥陀坊主、琵琶坊主と呼んでいた。夏が近ずいた。

この年は雨が少く田畠はひわきがついた。水が欲しい。一滴の水でも、水は釣川の底をわずかに流れていた。人々はそれを汲み上げ田畠に注ぎ、せめてもの心の慰めとした。盲僧はその話を聞き肩をくらせ何時ものようにとぼとぼと去っていった。

水は、水はある。多礼の山懐の二つの大池には満々とたたえられている。しかし、この峡谷の水は谷の入口の巨岩にはばまれて平野に流すことはできなかった。

ある日、僧はその池の話を村人から聞くや、多礼橋を渡り道を山へとった。手さぐりで樹林をわけて進むこと数刻。彼の手は巨岩の岩肌を探あてた。岩はあまりにも堅く、あまりにも大きかった。彼は巨岩の前に坐し、「この岩破らしの給え」と神仏に祈請した。来る日も来る日も彼は祈った。木洩れ日が照らし、日が木の間隙れに彼をうつした。祈りの声は谷間に木魂し鳥は羽ばたき飛んで行く。その間、川では頼みの綱の釣川の水も遂に涸れ果てた。水争いの必要もなくなった村人はただ生して稲の枯死するのを待つばかりとなった。その頃、多礼の奥で僧が水請いの祈祷をしていると言う話が伝った。物好きな坊主だと思っていた村人も一人のぞき二人のぞきとしていたが、僧の祈りの真剣さにうたれ、その中、老若男女凡ての村人が巨岩の前で僧と共に祈った。そして誦経の唱和は幾日も続けられた。満願の夜巨岩は突気味な鳴動を始め人々は怖れおのの き四散した。鳴動はなお続き僧はこゝ身の力を奮って祈った。空はかきくもり、暗雲がたれこめただならぬ空模様になって来た。その時、セン光が岩にほとばしった。村人が恐る恐る目をあげると、見よ！その岩には白キ裂が入り、それに黒く本その筋が走りそれが次第に広く大きくなって行く。

水だ！水だ！人々は我を忘れてその黒い筋を追って行った。水は行った。

やがて滝となり、しぶきを上げて流れだし、野をひたし田畑をひたしていった。

人々は自の家に帰った。倉から米俵をかつぎ出した。土や石をつめて土嚢を作るためであった。今まで、水争いでいがみ合った人々が協力して釣川の川底に土嚢を積み田畑を流れた水をせき止めた。せき止められた水は再び灌漑に利用された。

村は再びよみがえった。翌朝、我にかえった村人は僧の姿を探し求めたが、ヨウとしてその行方が知れなかった。

ただ彼が平生口すさんでいた平曲が月明の夜には琵琶の音と共に滝口より聞えるという。

「昨日は東関のふもとにくつばみを並べて十万余騎、今日は西との宿にともづなをといて七千余人、霧洗々として晴天すでに暮れなんず」その僧は平氏ゆかりのものというのが定かではない。

(H)

宗像大社献詠 俳句作品集（七六）

群れおよぐ稚魚に冬陽のあたゝかし　大井　吉田　杏子

土工等の焚火育てつ高話　大井　吉田　和子

一輪は落ちて一輪寒椿　大井　安部　吟松

草餅は針娘の土産雛飾る　田熊　小野　淡坡

下萌えて顔ちんまりと黄たんぽゝ　大井　木原ふさ子

主婦よれば旅の話や芹青む　門司　永島　哲夫

急潮のしばしたゆたい御和布刈　飯塚　福永　アキ

ゆかしくも宮居のさとのすみれ草　平等寺　中野　きみ

明日来る娘に持たせ度き芹を摘む　福岡　広田　美津

三宝に飛こむ雪や初午祭　津屋崎　浜津　鴻浪

椅子くるり枯れの鴉を切り放す　津屋崎　鶴　賀水

木琴の気まゝに土筆顔を出す　田島　白雲　山人

若き目に老いとほしむ針供養　田島　白雲　山人

出光佐三一問一答シリーズ ㉜

マルクスが日本に生まれていたら

質問　民主主義でも権利と同時に義務ということを強調していますが、義務ということは、言い換えれば、相手の立場を考えるということじゃないかと思いますが……

出光　権利を主張するということが先にあるから、義務という言葉がそのあとに必要になってくるんだ。義務ということは、権利を主張することから必然的に出てくるんだ。しかも実際は主張することばかりが行なわれるから、義務を強調することが必要になるんじゃないか。明治維新前の互譲互助の日本には、権利を主張することがなかったら、義務という概念も生まれなかったんだね。権利も義務も外国から輸入した考えにすぎないよ。

こういうことが言えないかね。なにか或ることをとくに強調しているときは、そのなにかがそこにないからじゃないか。たとえば、人類愛ということが特別に叫ばれているところでは、そこに人類愛がないからだと言えないかね。西欧で民主主義を盛んに主張したのは、封建的なものが非常に強かったから、逆に民主主義を強く唱えたということだね。

質問　必要だということは欠乏しているということですね。英語でもウォント（want）がそうですね。

ところで、以前に発表された「期待される人間像」の道徳観ですが、マルクス主義者は、これは誰にでも認められる道徳ではなく、やはり現在の日本を支配し、指導する立場にある資本家階級、またはその代弁者の考えであると言っていますが……

出光　そのマルクス主義者の言い分には、ぼくは賛成できないけれども、あの委員会には、ぼくも出席していろいろ議論した。そこで或る委員から、教育勅語が日本の道徳として立派に存在するではないか、という意見が出たときに、それに対して、今は教育基本法の中に道徳というものがあるから、それで十分ではないかという答弁があった。そこでぼくは、教育勅語の道徳は日本固有の道徳を説いたものであると思うが、敗戦後占領政策によって、その日本固有の道徳は否定されているではないか。したがって教育基本法の道徳と教育勅語の道徳とは、相容れないように思うがどうですか、この委員会は日本固有の道徳を採るのか、それとも日本の道徳を否定して教育基本法のモラルを採るのか、という質問をしたけれども、これは解決がつかなかったね。ぼくから言わせると、日本の固有の道徳は、永遠の平和と福祉の道徳であり、教育基本法の道徳は対立闘争の外国のモラルを直訳したものであって、日本の国体とか民族性などを基礎としたものではないね。

質問　要するに、根本にそういう人間愛とか、平和と福祉そうくるというような基本的な考え方をもっておれば、その時代時代において具体的にどうすべきか、という判断も出てくるということですね。

出光　そこにぼくの言う人間尊重がある。平和にしあわせに暮らすということをしっかりもっておって、あらゆる場面に応用しようというような人間でなければならないんだ。そういう人であれば、極端に言えば、法律・規則もなんにも要らないと言える。ところが人間がしっかりしていないと、法律・規則をつくってむやみやたらに乱用するようになり、人間が法律や規則の奴隷になり、理論や、学問の奴隷になる。人間が物の奴隷になってはいけないよ。人間の心がすべてのものを支配するということでなければいけない。

さっきも言ったように、出光の歴史は一面から言えば、奴隷からの解放の歴史とも言えるんじゃないか。まず、ぼくが神戸の商事商業を出て丁稚奉公をしたのは、今から言えば学問の奴隷になっていなかったということだ。そして創業のときに、黄金の奴隷になるなと言って出発している。金を尊重はするが奴隷にはならなかった。それが現在では「人間が資本であって金は資金である」というようなことをはっきり言えるようになったわけだ。それから戦中は、軍が戦時統制の名のもとに法律・組織・規則万能の行き方をしたので、それとたたかってそれらの奴隷にはならなかった。それから戦後は、占領軍の権力に屈伏していない。権力の奴隷にならなかったわけだ。そして世界石油カルテルとたたかって、国家のために非常な貢献をしている。もし出光なかりせば、日本のエネルギーのコストは高くなっておるべき結果になったろうと思うね。それから独立後の日本だが、屈理屈をつけて数で決するというのが、今の行き方だ。出光が言っていることは、数や理論の奴隷になるなということだ。

このごろは、さらに、もう一つ進めて主義の奴隷になるなということを言いたくなってきたね。共産主義でも平和・福祉を目的としているのだろうが、それに達する道・手段を誤って、対立闘争して行き詰まっている。それにもかかわらず、その誤った手段にいつまでもとらわれているということは、手段の奴隷、主義の奴隷になっているんじゃないかと考えるね。いかなる主義も立派なところはあるけれども、それを人間が実行するときに奴隷になっちゃいけないね。主義を活用しなければいけない。

31、主義の奴隷になるな

質問　主義の奴隷になるな、というのは、いい言葉ですね。マルクスも面白いことを言っていますよ。「私はマルクス主義者じゃない」と。マルクス信奉者に対し皮肉を言ったわけですね。

出光　マルクスも主義の奴隷になるなと言ったわけかね。いかなる場合にも、人間の尊厳を尊重するということを忘れると、主義の奴隷になるわね。だから、ぼくの言う人間尊重というのは前に言ったように、尊重すべき人間になれ、尊重すべき人間というのは平和と福祉を打ち立てる人が尊重されれば人間だ、という意味だ。人間に物を与えたりなにかすること、人間尊重じゃないよ。今はなにか人間に物を与えてせいたくさせたりすることが、人間尊重のように勘違いしているところがありはせんかね。それから人権を尊重することと、人間尊重とを混同してはいかん。権利を尊重することと、人間の尊厳を尊重することは違うよ。権利を尊重することは対立闘争の国の言い方だと思うね。

質問　人権尊重は人間尊重の一部だと思います。ところが戦後アメリカの民主主義が入ってきて、人権の尊重なくしてどうして人間の尊重があるかということで、人権がまりに強調された結果、人権尊重イコール人間尊重というふうになった感じがあります。

出光　十年ほど前、アメリカのピッツバーグを訪問したとき、大勢のパーティの席上でぼくが「君たちの民主主義はせものだ」と言ったことがある。民主主義を金科玉条にしているアメリカだから、それにはちょっとみんなびっくりしたよ。そこでぼくはこう言ったんだ。「民主主義というのは、自分のことは自分でやる。そして自分の余力でもって他人のために尽くす人の言うことじゃないか。自分のことは自分でやるような人にしてはじめて民主主義を唱える資格がある。それなのに君たちはタイム・レコーダーを押させたり、事務所では机を向う向きに並ばせてうしろから監督している。一分間たりとも目を離せないような人や、うしろから見ていなければ信頼できないような人間がどうして民主主義を唱えられるか」と言ったんだ。これは事実だから、向うとしては返事できない。そこで「出光はうるさいことを言うから、「ぼくのところは出勤簿はない」と言ったら、びっくりしていた。はたして信じたかどうか。それでともかく話は済んだ。

（つづく）

経営とは何か

PFドラッカー

人がこれをまじめに取り上げてくれないといったことがあげられる。

たとえば製造担当の役員あたりはそれを読むと「非常におもしろい」ということ、そこで間違えたのは、一九六五年この形に合わせるためには、一九五五年あるいは一九五三年に、ただちになさねばならないことは何か、ということを見てみた場合、そこで間違えたのを行なって、推定される形に基づいて、たとえば一九五五年のいろいろな資料に基づいて一九六五年の形を見る。この一九六五年には何をなすべきかということを考えて、基本的に何が正しいか、これはあたかも一つの創作のように思われて、そうという予想を立てようという試みをしたのである。多くの場合、これを科学的に数量的な考え方できめていうということを試みたのである。

アメリカではこういった大事業になれば、しばしば三ページ余りもあるりっぱなレポートにいろいろと図表などが示されて、りっぱなアイディアが述べられているけれども、それが現実とやはりかけ離れている。十分なインパクトがないといえる。

（つづく）

宗像薮庵先生百話

南方

華やかなりし頃

宗像太郎坊

妊娠看破術

工場に、三八歳のクフな未亡人がいるが、立派な体格にもかかわらず、金皿比重がだんだんさがってきた。

一月が一・〇五五、八月が一・〇五三、一一月が一・〇五二、そして、寄生虫もいないのに貧血が増悪。

毎年三回、全従業員の金皿比重を調べているので、金皿比重と妊娠とのにらみあわせは、絶対、自信をもっている。

彼女のばあいも、妊娠にちがいないと思われるが、太っているのでわからない。

メンスはあるといい、毎月、生理休暇をとっていた。

そうこうするうち、今年の二月には、金皿比重が一・〇五〇ときがったので、呼びだして問いただすと、しくしく泣きだして、ついに妊娠をみとめた。

三月一三日、父親不明のまま女の子を出産した。

なお、金皿比重は、一般には妊娠時、一・〇四七くらいまさがるのが普通で、出産後、しぜんに上昇してゆくが、も遅いときは、チョコラB鉄プマロン錠をのめば、すみやかに回復する。

安住の地　聴診器

戦地と言うものは、色々不公平のあるもので、激戦している国の隣の国では、芸者と激戦を交えて大眠にしている。然し、これも人の運である。私は幸い連合軍が「捕われざる捕虜」と言っていた（捕虜にしなくとも、もう捕虜と同じである）ストラヨにいて、日々、脾肉の嘆をかこっていた時のことである。暑いので医務室には裸一つ、いわゆる「褌医者」である。聴診器等使っては軍隊が弱くなるというので机上に置き、放し、或る時中隊長が一週間ほど前に胸を打って熱が出きたというので、仕方なく聴診器のゴム管の埃りをこっそりぬぐって聴いてみた。ところが、呼吸音も心音もきっぱり聞こえない。二日酔でボケたかなと思ったが、言う訳にもかず、「何ともないですがね」と言って帰した。後でとっておかしいと思って、耳に入れる部分をコツコツと机上で叩いてみると泥層が出て、次きに蝉取蜘蛛の子が出てきた、ははあこ奴だなと思って更に叩くと出るわ出るわ、七、八匹出てきた。軍隊はいえお恥ずかしい事である。辺りを見廻して、兵なぎを確かめて捨てた。某教授がポリクリで診る患者ごとプロンヒィティスの病名をつけたそうだが、さすが不審を抱いて自室に帰り、穴を覗いていたら蜜蜂がブーンとプロンヒィティスの音を立てて穴から飛んで行ったと言う。私はこのことを思い出して「あー、さもあらん」と思ったのである。

華山登峰記

晴山居士

櫻高七二三米の山口県豊田町の華山登を昨年十一月十日に青年岩男さんと約束していたので準備して出掛けたが、風雪の為、小月駅に取り止めてから実行は年を越した。

扨て二月十一日建国記念日はうららかな好天気であったので遂に登山を決行した。門司駅を午前八時三十分発、下関唐戸を九時四分、西市行長鉄バスにてスタートした。

午前十時石町停留所下車……廃宅に潤開の梅花の香を放つ点々とした農家風景と小川のせせらぎを音楽として自称青年七十七才の私の独り歩き、古い明治時代の唱歌や軍歌を唄いつつ木屋川（下流は吉田川と云う）の支流に沿って溪谷へと進む。午前十一時頃「德仙の滝」へたどり着いた。

杉森の中にキャンプの幕営が二組、タクシーを含めて自動車が四台停っていたが人影はない。滝の上流へと向う道路は事中一般人の通行止の表示がしてあった。雪溶けの水が道路の真中を流れている。左の谷に沿った道は陽光を受けて乾いた好い道であった。

この道は山頂に施設のテレビ塔迄続いている。NHKの文字入りの柱が曲り角毎に歩哨が立っているかのように打ってある。道路補修の労務者が八人計り焚火を囲んで昼食していた。挨拶を交して又前進。頂上に近い北側の道は残雪が二十センチ以上……学生が数人下山して来た。午後一時頃、頂上に到着。今日は晴でないので遠方の視界は曇って見えないが周囲の山波はやはり誠に美しい。展望台の広い平か岩の上に腰をおろして昼食。午後一時二十分より急な坂を登り始めた。百米計り下って分岐点より左手に進み迷もせず第二の目的地岩刹の真言宗「神上寺」に達した。若い住職僧と暫らく会談してお茶をいただきながら休憩する。それより沓むした石段の参道を百段ばかり降って山門をくぐる。午後三時四十分、石町発山電バスに関門に乗車、小月町にて途中下車、小野田市の三男の処へ向う。

百号記念出版「宗像史話伝説集」編集進む

この度、本紙百号を記念して、今まで掲載した宗像伝説のうち、適当なものを選んで一冊にまとめるべく編集が集められている。

B六版、百五十頁、セミアート紙を使い、カット等も新しくする予定である。刊行は月下旬で、この度のものは第一集となる。第二集以下は適宜編集出版する見込みである。

宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共 500円

復興大計画案まとまる

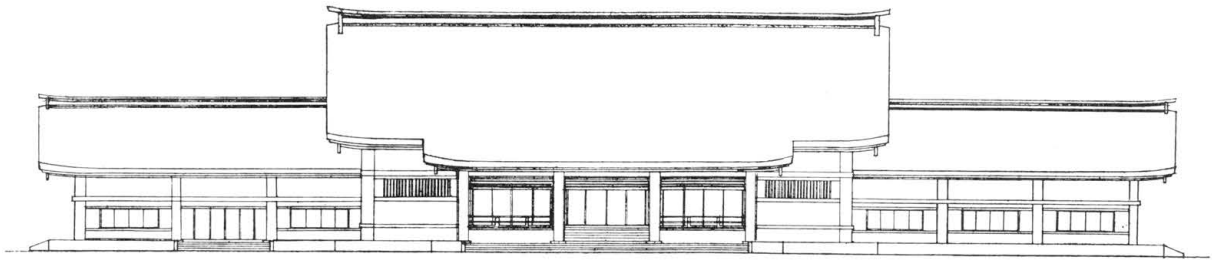
福岡県宗像郡に御鎮座の宗像神社は、天照大神の御子神をおまつりし、古くから朝廷を初め、国民一般の崇敬きわめて厚かった神社であります。歴代の皇室を守護され、国家の繁栄に御神徳を現わされたことは、史実の上に明らかであります。

現代の世情は、平和共栄の理想実現を、最も強く求めていますが、そのためにはわが民族の秀れた互恵親和の伝統を考えねばなりません。その根源はわが民族が今日も持続している敬神崇祖の美風にあると言えましょう。

私たちはここに、まずこの精神の復興を図るため、裏伊勢として敬仰する宗像神社が、史上の変動の中に転移した現状を整備修復して、昔の盛んな祭祀を実現し、御鎮座の意義をあまねく天下に示したいと存じます。

各位の御協賛を、切に御願い申し上げる次第であります。

宗像神社復興期成会



昭和十七年に宗像大社復興期成会が結成されて以来、永年の懸案であった大復興計画の原案がほぼ完成した。

この復興計画については、戦前に雄大な計画案が作成されていたが、戦後の大きな社会状勢の変化と共に神社の運営方法が大きく変ったので、戦後の新しい感覚により計画を全面的に変更することになった。

今度の構想では現境内は新たに造林を行ない森厳なる鎮守の森を作り、宗像祭祀の復興を計って名社としての形態を整えることに重点が置かれている。

また新時代に即応した新しい諸施設は神社正面（神湊側）の民有地を買収し、ここに奉賽祈願殿、参拝者休憩所、駐車場などを建設することになった。

尚本殿裏側に隣接していた旧田島小学校々舎（現在は神湊小学校と統合玄海小学校として宮田尻の地に発足）約三千坪は往時の大社の神域であり、特に第二宮、第三宮の跡地であるので、ここは第二宮、第三宮の舞跡を復興し、総社（辺津宮）を中心とした三宮一体の祭祀を復興する予定である。

復興の基本計画としては、古くから伊勢の神宮に次ぐ名社として知られてきた格式を整え、裏伊勢として大社の品位を保持するため、一般奉賽の祭儀と、公式祭とは分離することになった。

すなわち現在の本殿、拝殿は毎月の月次祭を初め春秋の大祭など公式の祭儀にのみ使用し、交通安全の祈願を初め、一般参拝者の奉賽祈願は新しく建築される祈願殿（上掲図参照）で行なわれる。

事業計画は、本年（昭和四十四年八月頃）より御本殿、拝殿（いずれも重要文化財指定）の解体修理に着工、二カ年の継続事業で完成させ、引続き同殿の防災工事に着手、昭和四十七年に完工を予定している。

またこの事業に並行して、現在御垣内にある斎館、授与所、神饌所は老朽化したうえ火気を使用するので、重文の本殿、拝殿に対きて防災上、現位置では思わしくないので御垣の外に建築することになった。

斎館は本殿正面向って右側、清明殿横に建築を予定しているが、現斎館よりも数倍規模が大きくなり、神職の参籠を初め結婚式控室、団体参拝、崇敬者集会など多角的に使用出来るよう設計されている。

また斎館に対時して勅使館並に貴賓館（現在茶店の位置）を建設し、特別崇敬者、参拝者の饗膳などに使用することにしている。

尚現在の神域は車輌の進入を禁止、参拝者は正面広場に車輌を駐車し歩いて参拝していただくことになる。したがって従来余り活用されていなかった表参道が、今後は中心の参道として使用されるようになる。

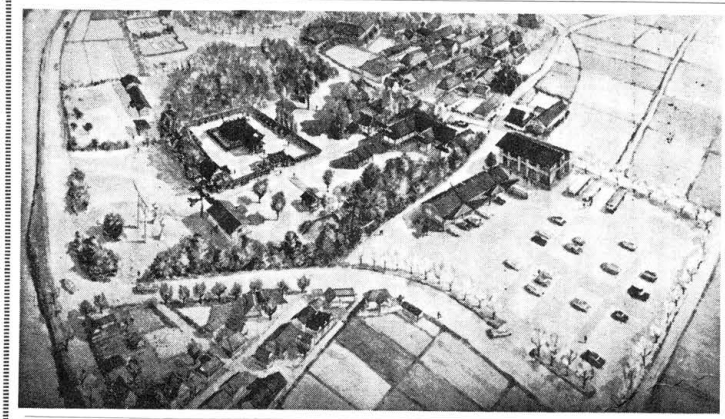
次に新しく宣取された民有地約六千坪は、現在密集している神社正面を解放すると共に、間口六十六米、奥行二十二米、高さ十六米の大祈願殿を建設し、近代的な設備を整えた新しい斎殿を作り、現在輻輳している参拝祈願を円滑化し将来倍増が予想される参拝者の便宜に供することになる。この建物は、授与所、参拝者控室、祈願所、事務局など主要機関をすべて一カ所にまとめ、神社の管理運営を能率的に働らかせるよう考慮がなされ、他社では見られぬ新しい試みの建物である。

またその頃には参拝者の休憩所が作られるが、内部は豪華な作りで、茶店、売店、食堂、休憩室なども設け参拝の皆様にゆっくりとくつろいでいただき、家族共々楽しく宗像参りをしていただけるように配慮がなされている。

此の工事期間中は、御神座を第三宮（本殿向って左側の摂社）に御遷座し祭儀を行なう予定であり参拝者並に崇敬者の皆様には色々と御不便をおかけしますが、交通安全の祈願を初め諸祭儀は従来通り斎行致します。

以上が大体の復興計画案であるが、この案を基本として現在完成模型を製作中であり、この模型を中心にして、復興期成会長出光佐三氏初関係者に再度御協議を願い、最終的な実行計画書を完成させる予定である。

今回の大復興計画は、現在の本殿が完成以来四百年ぶりの大造営で、これが完成迄は多難な前途が予想されるが、現在奉仕している職員一同、千載一遇の機会として、この事業に心血を注いでいます。崇敬者各位におかれましても、多大の御協賛を切に御願い申し上げる次第であります。



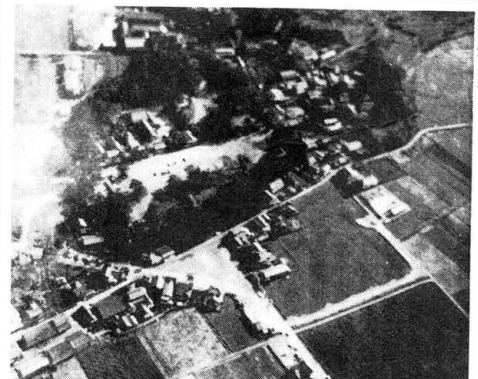


写真　上は成予想図
左は現況図

主なる事業計画

○本殿並に拝殿御修理
本殿並に拝殿は四百年を経て、白アリ等の損傷がひどく、解体修理を行う予定で、本年八月頃から工事に着手する。

○斎館建設
斎館は結婚式の控室、氏子、総代室、斎旧室、食堂、調理室、潔斎場、手洗いを含み、現在の予定では主要客数十四室が考えられ、建物の配置はコの字型になるものと見られる。

○奉賽祈願殿建設
交通安全祈願に来社される方々のために新たに神社前の土地に建設される。モルタル造りの拝殿で屋根付きの駐車場、冷暖房付きの拝殿、休憩室が計画されている。

○宿衛屋並びに神饌所建設
御殿の警固、拝殿での祭りに際して必要な屋舎である。

○被所新築
祭典の前に被所に祭員揃って被いを行なう場所で、四角の柱と屋根だけの建物である。

○透塀新築
現在の神門に続いている朱塗りの透塀が老朽化しているので、廻廊風に新築する。

○事務局新築

○モータープール建設

○手水舎新築
参拝者の方々の手を洗い、口をすすぐ施設で、現在多数の参拝があるので、大きな屋舎が必要とされる。

新聞雑誌・事務用品印刷
有限会社 大和印刷所
宗像郡宗像町東郷
電話 二〇二七番
有線 二八三一番

社報宗像の歩み

宮司　久保輝雄

日本民族の真姿と国家の進路を説いて、小屋にひとしい松下村塾に、多くの人材を育成した吉田松陰先生が、自ら二十一回の猛士と称された事情を思察してみる。国事に奔走、学問の講究に忙しい生涯にも、吾人がテレビのクイズを漫然と見るに似た一時があったであろう。その姓の吉田を分解、綴り合わせて二十一回とした時、漫然たる瞑想は猛然たる信念に一変、如何なる困難をも衝いて初志貫徹に奮起されたと思われる。

日本民族の真姿と国家の進路を説いて、小屋にひとしい松下村塾に、多くの人材を育成した吉田松陰先生が、自ら二十一回の猛士と称された事情を思察してみる。国事に奔走、学問の講究に忙しい生涯にも、吾人がテレビのクイズを漫然と見るに似た一時があったであろう。その姓の吉田を分解、綴り合わせて二十一回とした時、漫然たる瞑想は猛然たる信念に一変、如何なる困難をも衝いて初志貫徹に奮起されたと思われる。

今百年まで歩んで、その生い立ちを回想する。昭和三十四年は、皇太子殿下御成婚の佳歳で、記念事業を考えたが、苦しい財政の中では多額の出費は許されないので、奨学金設定と社報の発刊とを計画することとなった。

機関紙や、会報の類は、三号止りの短命に消え去るものが少くない。少し大げさだが、初めるからには、中途半端に壊してはならないと、二十一回の猛士を連想したというわけである。

奨学金は宗像郡内の人材育成の一助という目的で、現在もなお継続、既に多数の神恩に浴した卒業生が各方面に活動している。

社報の発刊は郷土の大先輩出光万兵衛先生の示唆による点が多いい。当時勅祭請願書の提出、沖ノ島神宝の国宝指定などの社務で上京の機会も多く、宗像神社史編集顧問の出光先生に会う毎に、大社を中心に郷土と各地在住の出身者を結ぶ組織、その機関紙発刊を要望されたのである。

昭和三十六年一月一日を期して、創刊号、即ち第一号の発刊運びとなったのであるが、これにはその頃赴任間もない小野祢宜があたり、その経験と理想を生かして世にまみえた次第。うぶ声あげた創刊号を今日手にしての感慨は一入深い。創刊に想うという小論の書き出しを拾ってみる。

「過ぐる日、許斐山の頂上に祀られた許斐神社の例祭に奉仕した折、郡内一望しみじみと千古連綿、この地に綴られた歴史の線を手繰って、祖先への懐しみをいだいたことがある。城山を鼻先として連なる峻嶺に、大友の強敵を迎えて、郷土を死守した戦国宗像党の血戦の俤、延々と流れる釣川に沿って拓かれた田園に、幾春秋風雪を衝いて耕作を進めた農夫の刻苦の姿、玄洋の波濤を越えて漁火を焚いた舟人の歌声、その思索は断片的であっても郷土の風物が呼ぶ懐古の情は故郷への愛着であろう。

この郷土に住む者、他郷で活動する者、その親愛と助の精神が宗像誌を育てた。明治二十四年に起り、太平洋戦争に至るまで、五十余の年輪を数えた努力は驚異に値する。代々受けつつ郷土の主要な出来事を報じ、他郷に在る者の消息随想を伝えて大いなる使命を果した意義は満腔の讃辞を惜しまない。」

三号止りに消えては、郷土の先輩に申訳がない。意地のそしりを受けては面目ないと編集担当はもとより職員は多数が協力した。数年後、大田権祢宜が担当し、昨今は末安権祢宜も編集に協力して、原稿の督励、誌面の充実に若い意欲を燃やしている。

昨年郷土宗像会が、関係者の総意によってその機関誌を社報宗像に合併することを申入れ、社報は再び戦前の郷土慕宗像の性格を加えるに至ったのである。季刊月刊の相違はあっても、共に先代宗像の継承であり、目的内容も似たもので、殖産も殆んど同一である。

この点から一本化が指摘されていたが難はない。

ここに旨味、本務のかたわら自更に想えば、宗像群落の精神的血脈として護持し来った宗像三宮の神々への至誠の敬仰と祭祀の伝承が宗像人相互の親愛と互助の美風を展べている。鎮目寺の森を渡る颯々の風音にも、大社につながる幽遠の祖先の声を聴く。

郷土愛が宗像誌を生んだ。

この郷土に住む者、他郷で活動する者、その親愛と助の精神が宗像誌を育てた。明治二十四年に起り、太平洋戦争に至るまで、五十余の年輪を数えた努力は驚異に値する。代々受けつつ郷土の主要な出来事を報じ、他郷に在る者の消息随想を伝えて大いなる使命を果した意義は満腔の讃辞を惜しまない。」

三号止りに消えては、郷土の先輩に申訳がない。意地のそしりを受けては面目ないと編集担当はもとより職員は多数が協力した。数年後、大田権祢宜が担当し、昨今は末安権祢宜も編集に協力して、原稿の督励、誌面の充実に若い意欲を燃やしている。

昨年郷土宗像会が、関係者の総意によってその機関誌を社報宗像に合併することを申入れ、社報は再び戦前の郷土慕宗像の性格を加えるに至ったのである。季刊月刊の相違はあっても、共に先代宗像の継承であり、目的内容も似たもので、殖産も殆んど同一である。

この点から一本化が指摘されていたが難はない。

ここに旨味、本務のかたわら自ら原稿も書き、編集から発送まで面倒をみてきた小野、太田の両担当者に、その労を謝すると共に、今後も職員はもとより、郷土関係者や、一般読者のご協力を切望してやまない。関心の少い人から見れば、営利なき出版でめだたない仕事ながら、敢えて猛士とならぬまでも、責任と忍耐を思う人でなければ、努力の積み重ねに堪えない。最後に一言、特定の政党宗派や個人の非難でない限り、どんな種類の原稿でも結構、また本誌向上のためのご意見もありがたいこと、よろしくご指導、ご援助くださるようお願いして結びとする。

×　×

武蔵国に宗像神社を拝す

占部真太郎

四、五年前某日、安永渡平氏（元八幡化学社長―赤間）御存命中、八幡化学と富士製鉄の化成品輸送業務のタール製品取扱業協同組合常務理事福島常二氏（元八幡製鉄社員）の訪問を受け依頼されることがあった。

昔から同氏の邸内に宗像様が祀ってある。安永氏や私が筑前宗像出身である故社号額を書いて貰いたいとのことで、お家のことなど詳しく語られた。

安永氏は手が不自由だから私に書けと云われたが、出光興産会長にお願いしようと考えつつも、つい身近な自主税伯父（日立製作所相談役）に無理に頼み込んだ。

数カ月後額が完成したからと、幾度も招かれて、やっと昨年十一月九日参詣することが出来た。

午前十時埼玉県大宮市に御鎮座の氷川神社久務所に伯父と私共夫婦は車で落合い、福島氏の迎えを受け、宮司東角井光臣氏の御案内で参拝した。

同社は旧宮幣大社、須佐之男命、御妃稲田姫命、御子大己貴命（大国様）を奉斎、三万坪の境内、その楼門は西の加茂、東の氷川と称せらる。規模、うっ蒼たる緑樹の中、朱漆の荘厳な神殿の前で敬虔な祈願を捧げた。幾組もの結婚式の華やかな人々が写真を撮り合っていた。御主神二柱の夫婦神睦まじく、大国様初め優れた御子神を儲けられた御神徳にあやかるべく、神前結婚が非常に多い、との宮司さんのお話しに年頃の私の娘にも配偶をとお願い申上げた。

御社は関東全平野の祭政の中心地大宮に凡そ二千年前創祀され、武蔵一宮と崇められた。日本武尊は東東鎮定の祈願をされ、足利、北条、徳川と武家の崇敬特に厚く、明治天皇は三度に亘って行幸、御親拝あらせられた。

この境内に摂社として奉祀されているところの宗像神社に参拝すべく車の落着場所とした訳である。宮司さんの言によれば須佐之男命との縁りで、宗像三女神がお祭りしてある。この姫神方は福神、弁財天女と擬せられて、通称弁天様と崇められ、女人の信仰殊に厚く、福徳の霊験あらたかとして参拝者が絶えない。十二月十日には大国様比須様も、御到来あると当日は数十万の参詣者で賑うとのことである。氷川神社を辞して車の混み合う中山道を北上、鴻巣市大字大間の福島邸に着いたのは、十二時を過ぎていた。一万坪以上の敷地に、亭々とそびゆる大樹の森、蒼々と繁茂する孟宗竹に囲まれた二、八〇〇坪の宅地に建つコンクリートの近代的邸宅に案内された。前年四百年を経た木造住宅を建替えられた由で、裏側納戸部屋を旧いまま残して、その面影を保存してあった。早速屋敷内に奉斎された宗像神社に到り、此の日の為迎えた氏神の神官の祝詞のあと、玉串を捧げて参拝した。古びた八畳敷位の社殿、祭壇上に四四十柳、長五十柳位、検の生地の板に白色に浮き彫された宗像神社、倉田主税書の額が清楚に極めて上品に掲げられている前で低頭すると、遠く創祀されて幾百年、歴史の跡などとりどり想像される。かりか、遥か郷土の大氏神宗像大社の社殿に佇んでいるような気持ともなった。殿内には多くの人から奏納された弓矢、絵馬など飾られ、施薬免許の表札、薬木櫃の苗が育っていた。同氏のお話しによると、この福は二八〇年前、元禄時代（一六八八―一七〇三年）の記録があるが、恐らくその以前からあったと信じている。徳川吉宗の享保（一七一六―一七二五年）から家斉の享和（一八〇一―一八〇三年）の間、福島家の当主、福島雄（幸いと称す）は国学者賀茂真淵（一六九七―一七六九年）の門弟として国学を修め、現在迄大真重要文化財「武蔵鑑」を残した。当家所蔵の真淵の手紙「去夏出生の孫女が痘瘡にかかった。門弟福島幸いがその屋敷内に祭った筑前宗像の神社にその治癒を祈願し、呉れたから必ずあやまらなく、或いはいもいたずらで治ったら六、（傍線原文の通り。いもとはアバタのこと。真淵が浜松の実家留守居番に送ったもの、賀茂真淵全集所収）の巻物を展げながらのお話である。

此の地方は嘗て大領であったが、元禄十一年儒者林大学頭の所領となった時も、福島家が元々此の地の豪族の末、大官名主として信望厚く、林家はその知行所を同家に管理させた程の旧家であったが、その昔何ごとか故事、申来によって宗像神社を奏祀したか、又痘瘡の神としたかは不明である。兎に角、宗像三女神を庭内に奉斎し、御家族の御歓待も受けて、伯父は郷里神興村津丸の生家の思い出話など尽きぬ歓談がなごわされた。

四時も近くなって出発、先住人穴居時代の遺跡「貝百穴」、最勝「長瀞峡」に降り立ち、秩父の山を抜けて夜遅く帰宅した。

全国神社明細帳に遠古には宗像の神を祭る社が三百三座あるとの由だが、此の日此の地で、此のような因縁によって毎朝神棚に拝む郷里の大氏神様、宗像大社の御神徳を仰きまつる機会に会った感激にひたりつつ、車に揺られて帰ったことである。

（八幡化学事務取締役）

玄海グリーンラインの開発

井原元彦

最近に於ける人口の都市周辺集中化は日本全国に見る現象であるが、我が宗像郡も北九州市と福岡市との間にある故多分に洩れず、日々毎日この波に押寄せられて来ているのであります。殊に鉄道沿線、国道沿線の宗像町及び福間町においては通勤の便特によいため、急激に増加しつつあります。

之に対応するため、各地に住宅団地が造成されているのであります。一面やかに開発されて行く隧には、受入態勢の整備に先行投資的事業をしなければならない苦痛がある訳であります。上水道の問題、下水道の問題、道路学校等用意をして置かなければならないのです。

我が福間町もこの用意のため昭和四十年度より昭和四十三年度迄は可成財政的に苦しみましたが、今日に於いては、やや体力がついて来たと言える状態になりました。

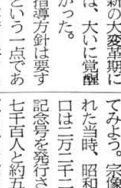
今迄、新開発に向っておりましたが、今、旧来の地域の整備改良には御辛棒をして頂いて唐ったので、これからは大きくなった町として之等の整備改良を現代的に強力に やって行けるようになります。

お互いに譲り合い、辛棒し合って、力を合わせて開発発展に努力することが、一番肝要であろうと思います。万遺無く、公平にやって行くことが、一番望ましいのであります。財力がない時は、極めて消極的な一時凌ぎの措置しか出来ません。しかし或る程度力がついた時には徹底的な措置がなされると考えます。

郡内各町共、同様の立場に置かれているのですが、社会状勢の仲展に伴い、町民の要望も、高度化して来ている今日、待つ時は待つ、やる時は充分やる、と言う気持がなくては、発展して行く郡内が、中途半端的になってしまうおそれがあります。今回県が音頭取りに福岡市、粕屋、宗像、遠賀の各郡と、北九州市と相図って、玄海グリーンラインの協議会を作り、手を繋いで新都市圏の開発に立上ることとなりました。

この計画の実施に当っては、前に述べましたような持ち寄りに臨んで頂きたいと思います。

（福間町長）



教育的風土宗像の変化

石田重成

我が郷土宗像は、古く神代の昔から神郡として輝かしい多くの歴史伝統に富んでいる。宗像大社にお鎮りしてすく誰もが気付くであろうことは、御神殿を囲んで多数の摂社、末社があり、それらの御祭神は、皆それぞれの町村に奉祭されている神々で、遠く遠賀、筑紫手等にも及んでいる。この事実は、我が宗像大神がわが宗像の総氏神であらせられることを如実に物語り、我らは同じ民族、同じ氏子として生活を共にし、多年の間、風光明美の自然の中に、親和醇厚の美俗を醸成して来たのである。

その後、明治維新の大変革期に遭遇した宗像民族は、大いに覚醒奮起せざるを得なかった。

当時の郡の世論指導方針は要するに「人材養成」という一点であり、素質あるもの、事情の許すものは、進んで笈を負って遠く東都、その他に遊学する青年も多く、その後六十名を成す実業家、政治家、学者、教育家を輩出し、郡内の教育熱も勃興して教育郡の名を恥すること至ったことも周知のことである。

然るに戦後世相は一変し、特に最近宗像が受けている各種の変動は、真にめまるるいものがある。交通機関の急速な発達、地理的条件の好転、時勢の進展等は、その主なる原因であろうが、原因の如何を論ずる暇もなく、情勢は目まるるしく進展、止まる所を知らないというのがその現状である。

我が町の現状を見ても、福岡教育大学の統合移転、東海大学の設置、緑地団地、文化住宅の建設、大ゴルフ場の設営、農業の近代化等々の大事業は、駸々牛として吾等の眼前に展開して、宗像の山野は予想もしなかった姿に変って行く。仮に宗像郡の人口の動態を見てみよう。宗像株第一号の発刊された当時、昭和三十六年一月の人口は二万二千二百人、それが百号記念号を発行される今月では二万七千百人と約五千人増で、今後は更に急テンポの増加が予想され、人口五万人を数える時期も程遠くはあるまい。かくの如く考えていけば、郡内における郡外居住者の移住は年々に殖えて宗像の地形が変わり、居住者の思想、風習もまた変化して行くことであろうが、われわれは従来の宗像人の長所はこれを温存しつつその近代化をはかると共に、郡外からの居住者に対しては、宗像の風土に親しみ、素朴にして、文化の香り高い明るい町づくりのため協力をお願いいたしたいものである。

玆に私の所感の一端を述べて、宗像株百号の記念発刊を祝す。

（宗像町長）

心にも栄養を

赤間誠

「私たちは、肉体には食物、衣服住居を与え、運動させている。そうしてなるべく美しく楽しい生活をするために、時間と金銭を使っている。

だが、心にも運動をさせ、思想に食物を供給するためには、果してどれ程の注意を払っているだろうか」

これは、アメリカの社会評論家エネバ氏の言葉であるが、この言葉は、そのまま現代の日本人が十分味わって見る必要があると思われる。

食事については栄養云々と言い着ることについては流行だのとうのと神経を使い、住宅は住み心地のよいように改装を加えたり室内装飾に心を配り、健康を増進するために、スポーツをと、それぞれ最大の関心が払われているのに、精神面のことがすっかり忘れられているのが最近の日本の現状ではないだろうか。

道徳という言葉を口にするだけで反逆児扱いされるような日本が将来どうなっていくのだろうか。

社会道徳も、相互扶助の精神も過去の遺物かのように考えられている日本の姿に大きな問題をはらんでいるようである。

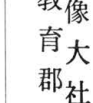
大学紛争問題を見ても知識万能主義の日本教育の欠陥が如実に現われている。まさに心の栄養失調ではないだろうか。

今日本で一番大切なものは、心に栄養を十分に与えることではないだろうか。私は現代社会の実情から観て、それを痛切に感じる。

（津屋崎町長）

祝 100号
ゆとりをつくる<中央>の貸付信託
中央信託銀行福岡支店
福岡市天神2丁目14番15号
電話 76局3931番（代表）

宗像談話室 宗像大社と教育郡宗像



宗像郡の制度は、古老の思い出話によく出る話である。建国の創業に、対内的に対外的に特に重要な位置を占める宗像の地に鎮まられた意義は、まことに重いのである。三女神の御任務遂行に、この地が選ばれると同時に、神郡の性格が生まれている。

この地は、早くから大陸方面との接触点として、海外の文物思想導入の門戸、外交軍事の交渉に関する要衝であった。古典に謂うところの海北道中は、この門戸要衝を指すもので、道主貴と称えられる三女神の使命観は、直ちに宗像の海陸が本質的に持つ使命観であったとも言えよう。

爾来文化的にも、九州の主眼的地位を占め、大社を擁する豪族は、宗像大社を教えられたことである。幼少の頃父母から国民道の祖神として極めて尊貴な大社が、この地に鎮座されている最色の事実を説き聞かされ、強い感銘の中に育てられてきたと。大社に対すること、宗像三女神が、天孫降臨に先立ち、天照大神から厳粛な御神勅を下された時、三女神の使命観が確立され、同時に神郡の地位が明示されたのである。

「汝三神宜しく道の中に降り居まして、天孫を助け奉り天孫に祭かれよ」と。この御神勅による道の中は、九州北辺の宗像の海域である。

宗像の制が定められて後、制度化されたのであるが、悠遠な古代宗像は、既に本質的に神郡の性格を備えていたので、単に制令の所産ではない。

この地は、早くから大陸方面との接触点として、海外の文物思想導入の門戸、外交軍事の交渉に関する要衝であった。古典に謂うところの海北道中は、この門戸要衝を指すもので、道主貴と称えられる三女神の使命観は、直ちに宗像の海陸が本質的に持つ使命観であったとも言えよう。

爾来文化的にも、九州の主眼的地位を占め、大社を擁する豪族は、宗像大社を教えられたことである。幼少の頃父母から国民道の祖神として極めて尊貴な大社が、この地に鎮座されている最色の事実を説き聞かされ、強い感銘の中に育てられてきたと。大社に対すること、宗像三女神が、天孫降臨に先立ち、天照大神から厳粛な御神勅を下された時、三女神の使命観が確立され、同時に神郡の地位が明示されたのである。

「汝三神宜しく道の中に降り居まして、天孫を助け奉り天孫に祭かれよ」と。この御神勅による道の中は、九州北辺の宗像の海域である。

神郡宗像は、大化改新によって

宗像人の使命

出光佐三

今から二十数年前、終戦のとき、私は「日本は戦争に負けたのじゃない。日本人があまりに日本人ばなれしているから、本当の日本人にかえるために天が与えられた尊い大試練である」といって、まず第一段に「日本人にかえれ」といった。そして第二段に「国体の精華を発揮して世界の平和に貢献せよ」といっている。当時は、気違いあつかいされたが戦後二十数年たって、私の言ったことが間違いでなかったことがはっきりしてきた。しかも不思議なことには明治一〇〇年の昨年を境として、日本人が完全に日本人にかえったといいうる。

それはどういうことかというと二十代以下の青年が非常にいいということである。私ども出光の約一万人の若い人たちと、出光の販売店の三、四万人の若い人たち、合わせて四、五万人が申し分ないい青年であることを私は身をもって知っている。それから東京の消防庁、警察庁、自衛隊などの青年が実に実に立派であることを、私は講演に行って知った。東京にいる青年がいいということは、全国の青年がいいということである。田舎の青年はいいにきまっているし、私は全国各地を歩いて実際に知っている。

獅子の子は生まれて三日にして千仞の谷に蹴落されるが、ほんとうの獅子であるならばその断崖絶壁を実力でよじ登って、獅子の王座につくと聞かされている。敗戦の結果、日本人は占領政策によって谷底深く蹴落されたけれども、若い人は断崖絶壁をよじ登って、まさに獅子の王座につかんとしたのが明治一〇〇年であった。

「それならば、今の教育界の姿はどうか」と心配される向きもあるが、あれはからだの弱い質の悪い獅子の子が谷底でシタバタしているようなかっこうで、あれになにができるかということである。日本伝統の和の精神を発揮して世界第一位の産業国をつくった産業界と全く対照的な姿といわねばならない。

それから最近の学園騒動などをみてマスコミをはじめ一般の人々が青年を非常に悪いっていうが、それは少数の有声の声に惑わされているのであって、大部分の青年は日本人らしく黙々と勉強したり、働いたりしている。それなのに少数のラウドスピーカーの声のみを大きくとりあげて、青年が悪いようなことをいうのは、青年がかわいそうである。

「心眼を開く」という言葉があるが、この際、国民は「心耳を開いて」多数の声なき声を聞くことを会得する必要があるように思う。少数のラウドスピーカーに惑わされてはならない。

そこで今年、明治一〇一年は、第二段の日本の国体の精華を発揮して、世界の平和に貢献するスタートの年である。国体の精華とはなにかといえば、皇室が決してわがままをならず、国民に愛の手をきしべられ、国民はその愛の手に抱かれて、皇室を尊敬し、国を愛し、みなが仲よく一致団結している。これが国体の精華である。この皆が仲よく一致団結する形は、産業界にはすでにできているが、さらに教育界、政界などにも広めて、日本全体が仲のよい形をつくり、それを世界に示して世界の平和に貢献することが明治一〇一年からはじまるということを私は直感しているわけである。これから日本民族が世界に出ることを頭においてやっていく必要があると思う。

そのときに、日本民族の祖神である宗像神社の神域に育った宗像人の使命は殊に重大である。私は宗像に生まれ宗像神社の御神徳によくしたが故に今日があると感謝している。宗像の人たちが世界人類を導くという尊い高い目標をもって今後進まれることを希望します。

(出光興産会長)

「宗像」百号の刊行を祝し

大社の参拝思出など

倉田興人

天高肥馬の秋。晴れわたった青空のもと、田島放生会で北九州に住む人々に楽しまれた十月一日宗像大社の秋の大祭日に家族連れで何回となく御参りした幼時の思出がなつかしくてたまらない。古稀の祖父に手を引かれて朝早く津丸の生家を出て、田圃の稲が色づく細道を女郎花の花さく野原を越えて広い国道が砂利で舗装された往還を村山田に出る。東郷の駅前から斜左に向って松山の奇麗な大井の農家の柿木に枝もたわわに赤い熟柿がなりさがる自然色ゆたかな景色を眺めながら田舎を過ぎてやっと賑かな田島の見える釣川とその参道に達する八粁の途はとても遠い感じが今も身に浸みている。

赤間から神社に此の日とばかり満員の参詣者を乗せた馬車や人力車が人波を別けて走る道を賑く行けば、境内からきこえるトランペット上や、太鼓の音が足の疲れも忘れさせ、心浮きうき急ぎ足になり、遂に祖父の手をひき立って大鳥居をくぐり「ソリ橋」を渡って笹やとチチキの雅楽に心をおさめて神前に祖父のまねして拍手をして参拝を済ませ、家族や親戚一同が頂取っている橋のたもとの茅生をひかれ、草履をはき替え、着物の尻をからげて帰途につく。其の時刻は大正末後の二時か三時であった。段々と足が疲れて引摺りだすと、祖父は「ここはお国の何百里、離れて遠き瀦州の……」軍歌を歌いながら勇を鼓して呉れ、朝きた路を戻って、兎も角も無事に夕方迄、我が家に帰った。疲れも楽しい一日がかりの大社詣が今も忘れられない。

大社詣は一年一回の行楽でもあったが、我が家にも屋敷の裏山に小さい祠があって大社様と称して一家がオコモリに楽しめる境内もあった。春には躑躅の咲きほこる坂道の並取から神祠の大掃除をして夕食の酒祭りを楽しむ我が家の大祭が年中行事となっていた。家庭では毎朝祖父が神棚の柴の水替えをして礼拝する無言のシツケがあって、私も現在家庭にあっては毎朝夫婦でお祓や、祝詞をあげ、明日には出前に明治神宮に参詣するのを習慣としている。

宗像大社には九州在勤の間家族を連れて参拝したこともあるが、今日と幼時の思出とを比較して驚くことはあんなに広く感じた境内の感に堪えない。大江上に大祭の盛大さを想像するとき、一層其の感を深くする。今日の子供達に往時の如き楽しい神詣があるからと考えるとき、宗像人として誠に暗澹たるものがある。

郷土の先輩である出光佐三さんの話を聞いて、近ぐ宗像大社の境内も拡張されるとのことで本当に嬉しく思っているが、何とか一日も早くそのことの実現を祈念してやまないと同時に家庭のシツケから宗像族は勿論のこと、日本人の道徳の根元である敬神思想の復活に資せられんことを切望する。

拙文徒に意を尽し得ないが、宗像大社の御隆盛と「宗像」の御発展を心から祈上げるのみ。

(三井鉱山社長)

真の人間教育への気運をつくろう

倉田主税

人は年を経るにつれてふるさとがより懐しくなるものらしい。若い頃はそれほどでもなかったのに、近頃は、福岡と聞き、宗像と聞くとむしょうにうれしくなる。だから出来るだけ暇をみつけて郷里に出かけたいものと考えているが、それがなかなか実現出来ないのは残念なことである。せいぜい年に一度帰ればよい方だろうか。しかしたまにふるさとに出かけると、昔なつかしい顔にもお目にかかれるし、なにより東京にいては味わえない心の落着きといったものを覚えて、やはり郷里はいいものだなあとしみじみ思うのである。

宗像には昔から教育の盛んなところであった。しかもそれは知識を教えるという教育ではなく、人間を育てる教育であった。いわば真の人間教育が行われているのは福岡県であり、とりわけ、宗像地方であるというのが、私の誇りでもあった。しかし、最近郷里から上京してくる人の話を聞き、また新聞を読んでいたりすると、時おり私の誇りが傷つけられることがあって心淋しい思いをする。本当の教育が失われたのは何も宗像だけではなく、むしろそれ以上日本全体が人間教育を喪失してしまっているのである。おそらくこのまゝでは日本の将来は大きな危機に瀕することとなろう。最近における常軌を逸した大学紛争の中にも私は祖国滅亡の萌芽を見る思いがして、じっとしておれない気持である。

なんとか今のうちに建直しをはかり、真の人間教育を復興しなければ崩壊へむかって急速度に走り出していくものと思われる。ところが今なお、このような危機感を持ちあわせていない人が多いように思われる。自分達がそのようなことを心配しなくても誰かがやってくれるであろうという無力感に支配されているようである。これではいつまでたってもよくなるわけがない。私は、今こそ国民あげてこれまでのあり方を総反省し、新しい国づくりへ立ち時だと思う。私は、その仕事を、宗像の土地からわきおこしてほしいと思うのである。先ず自分の家庭における教育をもう一度ふりかえり、子供達とこの問題を話合うことからはじめて、町に、村に、これからの日本をどのように造り直していくかというテーマで真剣な討論をやってもらいたいものである。このような気運がわがふるさとにみなぎる時に、宗像は、新しい時代の歴史の担い手となるであろう。

(日立製作所相談役)

神の恵みに感謝しつつ

立石昇

昭和三十六年一月「宗像」第一号が発刊されてから、この四月号は、百号に当るとのこと、八年三カ月の長きに亘って宗像大社の祭祀、諸々の行事を軸として、敬神の心を養い、風教の振作を説き、宗像の古事伝説を掘り起しては神郡宗像、教育郡宗像を懐古し、発展する郡の現況を報道しては、郡外在住の宗像人との連繋を深めるなど、この宗像誌が神社の神徳宣揚と信仰、人心の啓培に寄与貢献したことは、真に大きいものがあり、私は、心から編集者各位の御苦労と、その熱意に感謝するものであります。

扨て、既に本誌上に度々報ぜられていますので、皆様もよく御承知のことと思いますが、宗像大社は、明治百年のよき年を迎えまして昨年度より、五カ年計画をもって、本殿並に拝殿の御修理をはじめ神域の大復興整備、斎館建設等の事業に着手する運びとなり、既に昭和十七年に結成されていた復興期成会を中心に、総額概算七億円の予算で、その実現に鋭意努力中であります。氏子会といたしても、郡内氏子、崇敬者が総力を結集して、この復興事業の推進に協力し、神明に奉仕する神郡宗像人の真骨頂を発揮したいものだと思っております。

私が、宗像大社の役員として初めて奉仕するようになりましたのは、昭和二十七年氏子会評議員を依嘱された時からですが、責任役員或いは、氏子会副会長の役職を汚すようになった三十六年後、私の神に対する信仰も愈々進んで来たように覚えています。神を崇め、神の前にひれ伏すときの素朴な心！そしてそれが神明に通じて私に幸を与え、私を守って下さると信ずるようになった今日、この頃の心境です。

昭和三十七年二月十一日の佳き吉武の山奥から捜しもとめて発掘したのですが、その作業中、偶然にもその附近の落葉に埋もれていた奇岩大石四個を発見、これが私の庭に泉水を造る動機となりました。氷河時代のものだと自惚れているその岩石を入手できたのは、神の恵みだと私は、会う人毎に話すのです。歌碑の岩石を捜しに行かなかったら、到底私の手には入っていなかったからです。毎年十二月十五日に行なわれる古式祭には、神と共に新穀をいたく御座いますが、くじ引きで神符などが当って幸運を占うことになっているのですが、その最大なものは何といっても、神宝のおさな面を模造した壁掛と宗像三女神の御神軸でしょう。それは五十人か百人に一本しか当らないのですが、それが三、四年を置いて二本とも私が引き当てたというので皆さんから羨望されましたが、私はこれも神の恵みだと感謝しているのです。宝くじを何度買っても引き当てたことのない私だからです。

宗像大社の祭典又は、関係行事の行なわれるとき、前日まで風雨が激しく天候が危ぶまれていても、当日になると必ず恢復する、これも神社関係者の定説となっています。去る三月十五日に開かれた氏子役員会も、前日までの悪天候が当日は絶好の日和となって、役員の某氏が、そのことを神慮だと話題にしていました。

お正月の初詣では、来る可き一年間の幸福を神に祈るのでしょう。車の参拝と祈願が殖えてきました。自動車事故の激増に備えて、自身を守る心の支えでしょう。受験の祈願に、結婚式に、地鎮祭に、落成式に、私たちの日常生活の中に神は生きていられます。その信仰の深さによって神の恵みが感ぜられるのではないでしょうか。

最近の世相をながめて見ると、これが天の道にかなった正常な姿であると断言できる人は少いでしょう。どこかが狂っている、どこかネジがゆるんでいると誰しもが、首をかしげずにはいられない世の中なのです。国民生活の繁栄のかげに、何と安心できないものがひそんでいます。社会的秩序を混乱させる現実の問題として、例えば青少年の非行、一般犯罪者の激増、特に殺人、誘拐、人質事件などがあり、思想の混乱、対立闘争、実力行使の暴力秩序、法の無視、さらには利己主義、派閥主義の横行、利害打算、公の無視、無関心、愛国心や民族の誇りの欠如、教育理念の喪失、それからきた学園闘争の激烈さ等々、枚挙にいとまがないほどで、道徳の頽廃は、私どもの心痛に堪えないところであります。

こうした世相のあらしの中で、大いなるものの前にへりくだる謙虚さを持ち、神の恵みを待つ安らかさを求めて行くことが、自身を律する上からも、公的に世に接して行く為にも、極めて必要なことではないでしょうか。終戦後は、神棚もない家も多いと聞いて淋しいかぎりです。朝夕神仏を礼拝する宗教的情操を家庭の中に温存することが、蔓百まで……の諺の通り幼児教育の上にも肝要なことだと思います。

もとめられるままに、拙文を草して宗像誌百号記念の発刊を祝し将来、本誌が社会公共的な役割の上に立って、内容が愈々充実し宗像人の精神的な拠り所となり、親しみ深い読物として一層発展して行くことを祈って、この筆を擱きます。

(宗像大社氏子会長)

祝　宗像百号

西日本相互銀行
福間支店
福間支店長　中西隆治
電話　福間(2)1231　1233番

福岡銀行
宗像支店
宗像支店長　中村悟
電話　宗像　2017. 2214. 2721番

福岡相互銀行
古賀支店
古賀支店長　古賀信任
電話　古賀　3636～38番

宗像百号の歩み

「宗像」は今月をもって百号を数えた。創刊以来八年余の歳月を経てここに至るまで、色々の出来ごとがあった。編集部としても感慨無量のものがある。宮司以下十二名の職員が社務の傍、原稿を書き、写真を撮り、割付け、校正、発送の糊付け迄努力してきた成果ともいえるものである。もとより、今日まで刊行できたのは、当大社宗敬各位と宗像郡に関係する皆様方の暖い御支援によるものと厚く感謝申し上げる次第である。

社の折々の姿と郡内の記事を綴り混ぜて、遠隔地の郷土出身者に送ると言わば、郷土の香りともいうべき機関誌「宗像」百号の歩みを辿り返えると、そこには当大社発展の語ともいうべきものがある。ここに百号を辿りかえって、懐しい想い出の数々を綴ってみたい。

○昭和三十六年

九州の諸大社中逸早く月刊紙を世に送ったのは宗像大社であった。当社が未だ財政窮乏時の昭和三十六年のことである。

「宗像」は戦前、宗像出身者によって編輯刊行された郷土雑誌であった。戦後これが途絶えた為、再刊を願う声が大であった。この郷土機関誌再興の為に奔走努力せられたのが、故出光万兵衛翁であった。この気運に促されて、昭和三十五年頃「先ず私達在郷の者一同堅く手を携り是正の道に協力すべき母体を確立し、（中略）悠久の昔より連綿として続ける神郡の名に相応しい住よい繁栄の郷土にしたいと只管念願し」宗興会（仮称）案が提起されたのであった。この案は実現をみなかったが、この事業案の一つ機関誌発刊は、翌三十六年一月、タブロイド版新聞形式、月刊で当大社から産声をあげるに至ったのである。

この創刊号の紙面の大部分は、久保宮司と前権宮司小野迪夫氏が引受けて健筆を振るわれた。

「宗像」は各郡宗像会に送られ、宗像会関係の記事も紙面を賑わした。三十六年三月、当大社に剣道部が結成された。町の青少年を集めて剣道によって健全なる精神を培おうとする剣道部の六年有余に亘る活動も、其の後、町の父兄の喚起を促して、公民館活動の中に育成会を設けしめて、剣道を其の活動の一つに加えることとなったのである。

四月には宗像大社献詠歌会が結成された。伊規須ゆきさん等郡内有志が発起人となって、当大社境内に万葉歌碑建設の運動を起し、其の趣意書を本紙に掲載したところ、浄財が各地から寄せられ、翌三十七年二月境内東側ロータリー側に建立をみたのである。

三十六年五月、復興期成会によって、沖ノ島調査報告書統刊「統沖ノ島」が刊行された。この頃「宗像」は第三種郵便物となった。郡内唯一の第三種であった。これより先、ジュネーブ大学教授ジャンエルベル博士が来社されて当社高宴殿場を見学された。これを機として英文由緒記「ムナカタタイシャ」が刊行された。現幕津権宮司の努力に負うものである。

八月参拝車輌の増加に備えて、心字池の一部が埋立てられた。又、責任役員に現西鉄社長増根宗生氏が新に就任された。増根社長は月船の篤実な敬神家である。

○昭和三十七年

あけて「宗像」は十三号目を踏み出した。三号比りとはよくぎ言葉であるが兎に角何とかやって来た、やれば何とかなるという自信にも似たものが編輯部にできたようであった。これが一つの定型化をなさしめたのかもしれない。一面は論説、大会関係、阿蒙少言のコラム、献詠歌会詠草、二面、宗像談話室、社頭内外の記事、宝物紹介、小説、三面、宗像郡内の記事、町村往来、宗像伝説、四面、寄稿記事、大体以上のような大組の体裁が現在に至るまで継続されている。

三十七年一月に宗像会名簿を附録としてお送りしたところ便利であると社状をいただいた。

この年の四月号に宗像大社宝物館設立趣意書が公開せられた。この後、沖ノ島神宝が新国宝に指定されることもあって、宗像郡内に散在する重宝を集めて収蔵する宗像郡重要文化財共同収蔵庫設立の気運が湧きあがった。この頃これら重文を集めて管理する管理団体として宗像大社が国から指定を受けたのである。

この為、神社東側釣川沿いの田地三千坪が買収予定地とされ、玄海町の地元関係者が加わって建設委員会が発足した。吉武儀市郎氏は日夜地元田地所有者と接衝されたのである。三十七年の特筆すべきことの二は、海上神幸の復活であった。遠く正平年間（一三六〇年頃）沖ノ島から沖ノ島特産の竹に紅白の布をつけたものを神の依代（よりしろ）として、田島辺津宮まで沖ノ島の神をお迎えする御長手の神事がその源儀であった。今では郡内七浦の漁業関係者の奉仕によって、秋の大祭を飾る重要な儀式となっている。大祭が終って間もなく、出光興産店主の肝入りで表千家々元奉仕による献茶が行なわれるようになった。以後恒例の行事となったが、この献茶祭が滞りなく行われるために、出光興産福岡支店の方々による並々ならぬ奉仕が行なわれていることをここに銘記しておきたい。この頃、出光興産では、当時世界最大のタンカー日章丸を建造、宗像神社が船内に祭られた。

○昭和三十八年

この年は「宗像」にとって変革の年であった。三月には小説鐘の岬が完結し、宗像四郎氏貞が始まった。三月には海洋神事奉賛会が結成された。海洋神事の重要さに鑑み宗像氏祭関係者をうって一丸とする奉賛団体結成の気運が三十七年頃から関係者のうちに醸成されていたのである。御心結成を見るに至ったのである。

そしてこの年の四月に、玄海若布を宮中、天皇陛下、皇太子殿下に献上し、以後春の恒例行事となった。結成された海洋神事奉賛会は春の若布献上と秋の海上神幸の奉仕とが二大行事となった。この秋の海上神幸の際、神饌にお揃いになる三宮のお旅所ともいうべきところが必要とされ、草崎半島の山上二千坪購入が決定された。五月、出光興産千葉製油所に宗像神社が鎮祭された。この頃予ねてから郡内有志によって提唱されていた宗像郡宗像会が結成され、宗像会は独自の会誌を発刊することを決議した。今まで大社発行の「宗像」は新聞形式であった為か、戦前の郷土雑誌宗像の伝統を受け継いできたものとは見なされなかったのかもしれない。

しかし、創刊の経緯によっても知られるように大社発行の「宗像」は郷土出身諸先輩の熱望によって創刊されたものなのである。かくして、「宗像」は郷土機関誌的性格を脱皮して社報「宗像」への変換をとげなくされたのである。

宗像大社の参道にまたがる大鳥居が解体されたのもこの頃であった。国道一号線東郷駅からの道路が拡幅舗装される為、やむを得ない事であった。

六月、正式名称宗像郡重要文化財共同収蔵庫、則ち宝物館の本設計がなされ、募金が大々的になされた。かくて八月の終り、起工式が行なわれた。施工は清水建設に決定した。秋の終り、宗像郡赤間城山々麓に教育大学が統一建設される事になり、その起工式が行なわれた。

○昭和三十九年

さきの教育大学の向い側山麓一帯に宗像森林都市が造成される計画が発表され、その起工式が行われた。教育大学と森林都市との造成によって、宗像郡は次第にその姿を変え始めたのである。

四月に当社宝物館本館が竣工、五月中旬に庭園の整地作業が陸上自衛隊第四施設大隊の手によって進められ、見事な土地が造成されたこの後、内山緑地の施工で造園工事が進められたのである。

七月中旬、社報「宗像」生みの親ともいうべき出光万兵衛翁が他界された。

一方、当社奨学生であった松井尚子さんがミス日本に選ばれ、明るい話題を提供した。

この年の暮れの話題は沖ノ島鎮座神津宮のお屋根替えであった。沖津宮の完成であるお屋根替えに、宗像神社の完成に伴い、十月に久保宮司以下職員が渡島して仮遷座祭を斎行、十一月には沖津宮のお屋根はまばゆいばかりの銅板葺きに改められた。昭和七年以来部分的な御修理はあったが、この度のような本格的な御修理はなかった。

宝物館は庭園工事が完成、白亜の建物と緑の樹木調和して境内に美しい景観が生み出された。

宝物館長には出光興産、出光秦氏が就任された。この宝物館の竣工にともなって、興聖寺から一軍一切経四千三百余巻が宝物館に搬入された。

○昭和四十年

元旦から宝物館が開館した。三月には今までの宗像大社育英事業を拡大、郡内六中学卒業生のうち、高校進学者一名ずつの奨学生を男女一名ずつ計十二名として、神徳の余慶を広めることになったのである。

四月に八幡宗像会の安永渡平氏が急逝せられた。因みに其の後の会長は山路虎夫氏が継承し、現在は岡崎春雄氏が労をとられている。

この月に境内大鳥居橋際の松尾神社が本殿西側玉垣外に移され、心字池の清明殿側が埋められた。

参拝自動車の激増によるものであった。五月二十七日、沖津宮現地大祭は日本海々戦、十周年記念、及び御屋根替後の正遷座祭を斎せ斎行することとなり、崇敬各位にお知らせしたところ、希望者が多く巡視船の定員がある為、お断りするのに係は苦労したものである。

この年十二月号に漁業経営日本一と題して大島村の中村庄八氏を紹介した。過去三カ年の漁業経営の実績が農林大臣賞を獲得したのである。中村氏は宗像大社中津宮の敬神家であり、努力の人でもある。日本一がこれからも宗像から生れることを期待したい。

○昭和四十一年

宗像創刊以来始めてカラー写真を掲載した。カラー印刷は本紙印刷所では手懸ていない。カラーを先に印刷して後、他の印刷を調整するという技術的な面があったのである。この年、一面トップが変更された。社や風景の美を納めようというのである。そして今迄の祭り中心の記事は二面に廻された。六十八号には東郷橋畔の大鳥居解体を報じた。昭和八年、麻生大吉氏によって奉献されて以来、三千余年間当大社参拝のシンボルとして親しまれてきた大鳥居は、この年一月に解体され、境内万葉歌碑前に建てなおされた。

又、この頃から参拝の方々の為に話題の新車を見ると題して、車の記事を連載した。交通安全の社の社報に、当を得たユニークと各位からお賞めの言葉をいただいたこともあった。戦略産業といわれる車の販売は激化を加え、モデルチェンジは次々と行なわれている。当分この欄は続くものと思われる。小説「宗像郎氏貞」の作者、山下半司氏が都合によって転任されることに伴い休載、かわって幕浦柴舟氏が許奨の旗風を執筆している。七十二号には、海上自衛隊観艦式が博多港に於て挙行されるにあたり、自衛隊からの希望によって当社所蔵国旗の揮毫「神光照海」の扁額を神の神木に寄贈した。

○昭和四十二年

七十三号に昭マンモスタンカー出光丸竣工を、七十五号には宗像神社史下巻が刊行されたことを報じた。社史上下二巻の刊行によって宗像神社復興期成会は学術的にすぐれた二書を斯界に送ったのである。この年の夏、福岡市の大和久雄氏は「しめはしら石」を奉納された。この由縁は去る三十九年当社に参拝され、境内を巡られた時にはじまる。心字池、中の島あたりの奉納碑の中に祖父の名前を発見し、敬神の心から受け継がれているものであることを知り、その日から八桂石の奉納を決心され、三年後、美しい八桂石献の願いは叶えられたのである。

○昭和四十三年

この年は老てから胎動していた宗像社復興の地鎮が、あたかも火山の噴火にも似てふん煙をあげ始めた年とも言えよう。

昭和七年頃から歴代の宮司によって請願されていた勅祭社昇格運動が復興期成会を中心として活発に行なわれ復興計画が具体的に協議検討された。二月下旬、氏子会長であった吉武儀市郎氏が急逝された。神社と地元の間にあって、その労を惜まれなかった吉武氏を復興途上において失なった事は誠に残念であった。この氏の遺鉢を立石昇氏と力丸義雄氏が受継いで活躍されておられる。三月、九州で初めて宗像大社が史跡に指定された。

七月には邦文田結氏が復興期成会によって刊行された。又御復興について郡内で五万円計画で募金が始められた。出光興産に於いては全社員の方々によって、北は北海道から南は鹿児島に至るまで、きめ細かな募金が行なわれ、全国の浄財が復興期成会に集められた。八月には東京出光美術館に於て、当社沖ノ島神宝を中心とする国宝展が一カ月に亘り開催され、皇太子殿下同妃殿下御臨場の栄に浴した。この後、大阪市の博物館に於いても一カ月間展覧された。この十月宗像会が事務所を当社内に移し、機関誌宗像を社報「宗像」と合併したいと申入れてきた。神社もこれを受け入れ宗像は創刊当時の趣旨にたち戻ったのである。

○昭和四十四年

二月には出光丸の姉妹船松寿が竣工、宗像大神が奉安された。大復興計画が着々と進むにつれて、神社の本制を改め、復興課を新設し、専任の職員を配置して御復興に備えている。本紙に報ずるように、本殿の解体修理、新祈願殿の建設、境内の整備等興伊勢の名に応しい青写真が具体化されつつある。

以上創刊より百号まで主なものを通覧した。今まで各位から悪々誌代をお送りいただいている。各位に、編輯部一同深く感謝申し上げる次第である。

終りに本紙執筆者の紹介をさせて頂く。

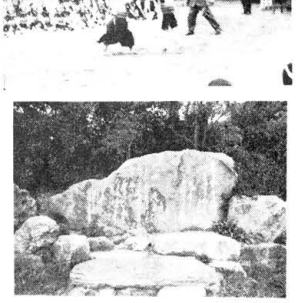
論説、阿蒙少言、「社史の中の宗像郡民」は久保宮司。小説「許奨の旗風」作者幕浦柴舟は幕津權宮司、福田長慶画伯は宇都宮祢宜、「祭り、まつり」は楠本祢宜、「城址を訪ねて」は本田權祢宜、「話題の新車を見る」は渡辺權祢宜がそれぞれ担当している。宗像伝説、その他の記事はその都度担当の職員に原稿を依頼している。今年から新進気鋭祢宜を編輯部に加えた。紙面の刷新に若い感覚を盛ってゆきたいと考える。

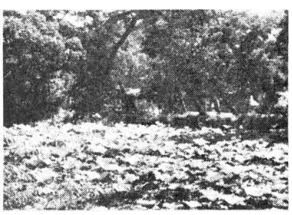
本紙百号の為に懇々原稿を寄せられた各位に紙上から厚く御礼申し上げるとともに、愛読者各位の倍旧の御支援をお願いしたい。

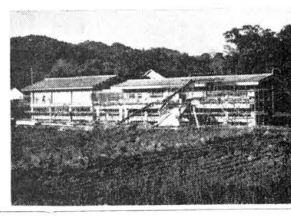
本誌印刷については、大和印刷所が創刊当初本紙の為に、一段十五字詰偏平活字を購入され、本年に至って鋳造機械迄は型を入れて活字の刷新に心掛けられている。

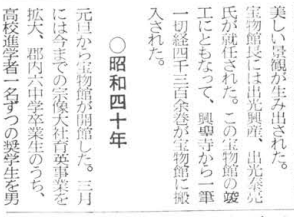
ここに、毎号所長自ら校正に精進されて本誌の印刷をそなえているのである。厚く感謝申し上げる次第である。

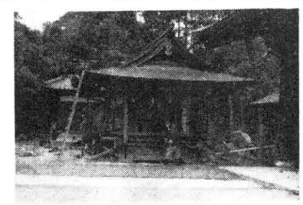
編輯部

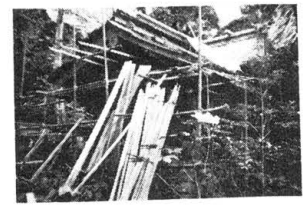


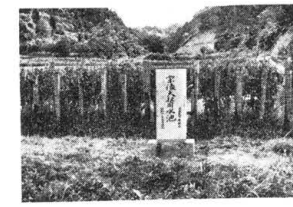












写真説明

左上――発足した剣道部の春季奉納試合

二段――東京道ロータリーに建設をみた万葉歌碑

三段――外人の高宴殿場見学

四段――埋立前の心字池、蒲の葉が美しい

五段――建設途中の宝物館

右上――授与所受付建物の間きを変更する為工事

二段――沖津宮のお屋根替工事

三段――酒の神、松ノ尾神社の移転

四段――吉武儀市郎氏寄贈の用水池

五段――正月の参拝